K2A-17
Z32-B88

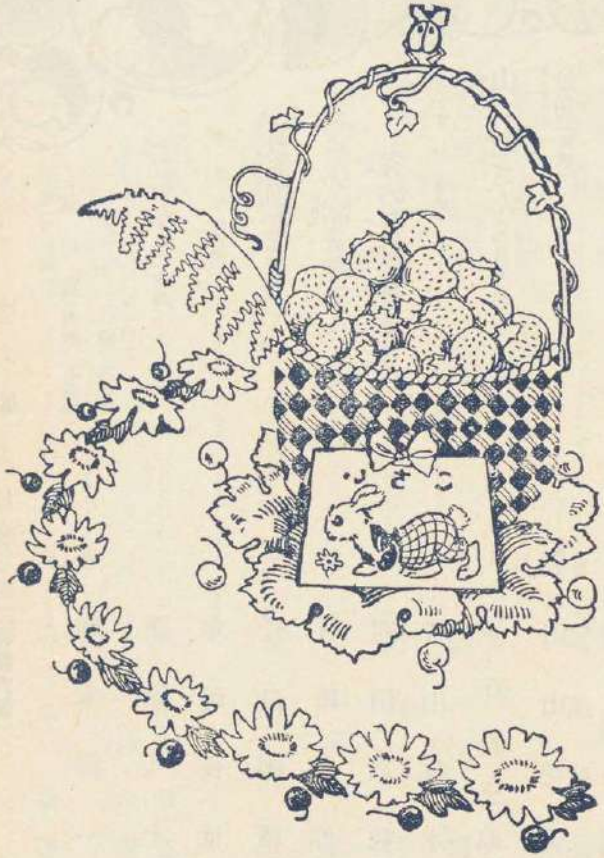
修監　馬生島有　村藤崎島

金の船

六月号

第二卷　第六号

国立国会
8. 3. 26
図書館



「金の船」六月號（第二卷第六號）

べに茸（表紙、石版刷）……岡本歸一
ぶらんこ（口繪、三色版）……西條八十
ぶらんこ（童謡）……西條八十
ダリヤ（曲譜）……本居長世
蜀黍畑（童謡）……野口雨情
ルルの話（童話）……有島生馬
一ノ谷の合戰（歴史童話）……窪田空穂
ダリヤ（童謡）……若山牧水
山六爺さん（長篇童話）……沖野岩三郎
金魚（童話）……田山花袋
不思議な樂の音（童話）……前田晁
清坊と三吉（童話）……吉田絃二郎
ちやぼ（童話）……磯部節治
一休和尚と筍（繪話）……
猿と兎の旅（童話）……橘逸雄
汐涸れ濱（童謡）……野口雨情
琴の太郎（長篇童話）……小山内薫
のお國（長篇童話）……長田秀雄
煙（童謡）……野口雨情選
雨が止んだ後（幼年詩）……若山牧水選
ボール（綴方）……
砲兵（自由畫）……山本鼎選
通信……
挿畫……岡本歸一
製版及三色版……田中松太郎

ぶらんこ（スティーヴンソン）

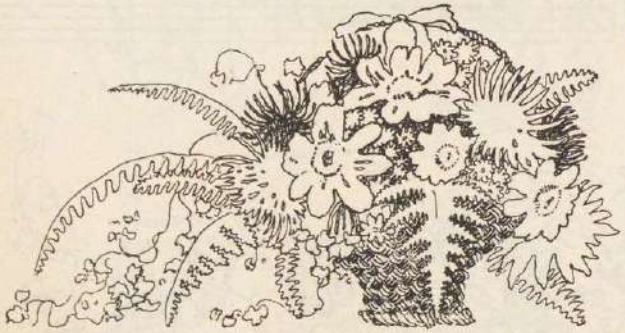
西條八十

鞦韆にのつて、青い空へ上るのは
君はどうだい、嫌ひかい？
さうさ、子供の遊びの中で
あれが一番面白い！
塀のうへ越し、空たかく
あがれば廣く見えてくる

流れる河や、木や、牛や、
田舎の光景が何も彼も、——
綠の畑や鳶色の家根を見おろし
又しても、——
うんと搖ぶりや空の中
それ上つたり、下つたり！

2 32 1 2 | 3 4 5 0 | 6· 6 5· 5 | 4· 4 3 2 |
クラーベテミタラ　アタイノカホヨリ

4· 4 3 2 | 1 2 3 0 | 5 — 6· 1 | 2 3 1 — ‖ ·
オホキナゲリヤ　マツカナゲリヤ

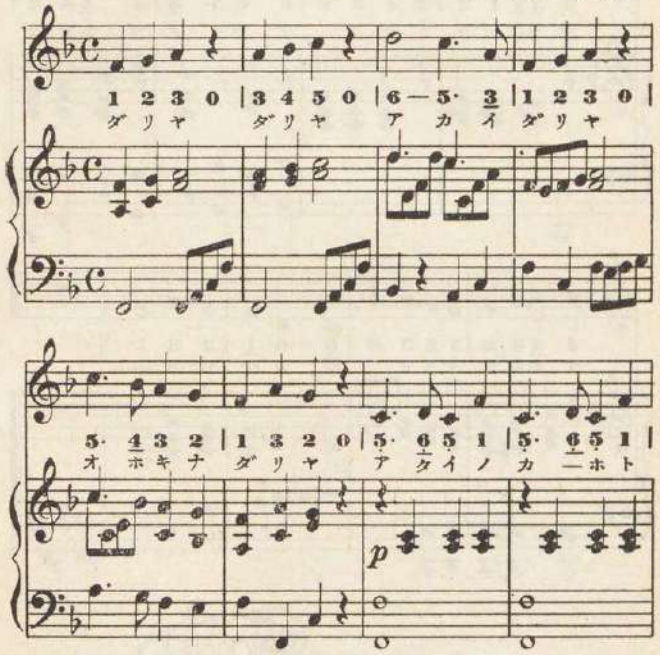


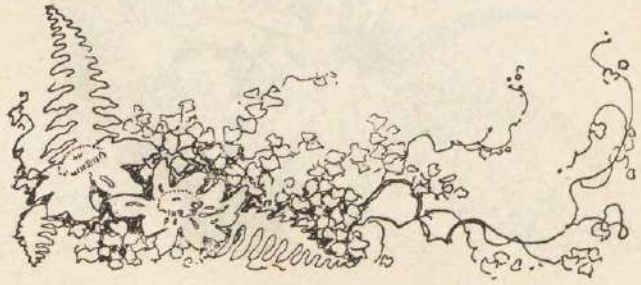
金の船

第六号　第弐巻

ダリヤ

作曲　本居長世
作歌　若山牧水





蜀黍畑

野口雨情

お背戸の
親なし
撥ね釣瓶
海山
千里に

風が吹く
蜀黍
畑も
日が暮れた
鶏
さがしに
行かないか

ルルの話

有島生馬

春雄さんとルルとは、何がなんだか夢中で、橋の上から、お池の中であつぷ〳〵やつてゐる冬子さんを、のぞき込んでゐる許りでした　冬子さんは沈んだり浮んだりしました。水を飲みながらも、救けて〳〵と一生懸命に叫びました。お母様は駈けながら、

『誰か來ておくれ、早く來ておくれ。』

と力一杯呼びましたけれども、お庭は廣いし、お家は遠いし、誰も來る人はありませんでした。

『春雄お前は何をぼんやりしてゐる、早く棒でもなんでもいゝから持つて來ないか。冬子が可哀相ぢやないか。』

と慌てゝ叱つてみても、そこらは綺麗にお掃除が出來てゐて、棒切一本落ちてはゐません。船は遙か向の岸にあるし、三人とも、慌てる許りで、いゝ智慧は一つも出ません。それだのにルルは三人の騒ぎ噪くのを見て無闇にわん〳〵吠えてゐます。

冬子さんは顔を出しては沈みます。沈んでは浮び上ります。あゝもう冬子さんは助からないのでせうか。なぜ三人のうち誰でも早く飛び込んで冬子さんを抱き上げてやらないのでせう。冬子さんは命があぶないのです……然し橋の下は水が深くつて、誰が飛び

込んでも冬子さんは助からない許りでなく、飛込んだ人の命も危險相に思はれました。

五

幸ひと云ひますか、神様のお助けと云ひますか、冬子さんは右の手がどうかした柏子で、土橋の支柱にさはりました。冬子さんは我知らず、それに嚙付きました。兩手で確かりその柱を抱い

て、やつと顔だけ水の上に出し、

『兄様助けてよ、兄様早く助けて……。』

と泣きながら叫びました。三人は土橋の上に腹匍ひになつて、

『冬子さん確かり柱につかまつておいで、もう大丈夫だよ、今直ぐ助けて上げるからね。』

と交る〳〵に云ひましたが、冬子さんにはその聲も耳に這入らないのか、兄様早く助けてよ、兄様早く、と呼んでゐますが、目はつむつたまゝで、そのつむつた目から濡れた頰に涙があとから〳〵湧き出してゐました。橋の上に三人はそれを見てゐるだけでも、生きてゐる心持はしませんでした。

春雄さんは人を迎へに家の方に走つて行きました。夏子さんは自分の腰帶を解いて、冬子さんの顔の處へ下げてやりま　たが、冬子さんはそれにはつかまらうともしないて、確かり柱に嚙付いたまゝ泣いてゐました。

その中に書生だの、小使だの、植木屋だのが澤山集まつて來て、やつと冬子さんをお池から救ひ上げました。お母様は濡鼠の冬子さんをそのまゝ自分の膝に抱き上げて、

『冬子さん、確かりなさい、もう大丈夫だからね、可哀相に、どんなに水を飲んだでせう。』

と一緒になつてお泣きになりました。するとそのそばにルルがお詫の積りだかなんだか、そつとやつて來て、冬子さんの額をぺろりとなめました。

『あら嫌なルゝよ。』と夏子さんが云ひました。

『こいつ悪い奴だ。』

と春雄さんは拳固を一つルルの頭に喰はせましたが、實は極くそつとで痛くはない位でした。するとお母様は承知なさいません。

『留吉や。』と植木屋をお呼びになつて、

『ルルをつかまへて、こゝから冬子さんの落ちた水の中へほふり込んでお呉れ。さあ力一杯ほふり込んでお呉れ。憎らしい犬だよ。』

とお怒りになりました。夏子さんと春雄さんとは、

『あらお母様可哀相に。』

とめてみましたが、お母様はどうしても承知なさいませんでした。いたずらものゝルルはとう〳〵留吉につかまへられて、どぶんと橋下の深い水の中へ擲込まれて終ひました。

ふいを喰つたルルは、一寸水の中で慌てゝゐましたが、直ぐ泳ぎ方を悟つたといふ風で、悠々と泳いで、五六間離れた低い岸から陸に上る事が出來ました。水を出ると二三度ぶるぶるつと身體を震はせて、水を切りました。毛の濡れたルルは細そりして、一寸

外の犬のやうに見えましたが、ぼか〳〵する時候ではあり、別に酷い目に逢はされたとも思はず、結句お湯でも一杯使つた位に考へてゐました。

六

冬子さんは翌日まで床の中に寝て、養生をしなければならないほど水を飲んでゐました。ルルは前よりも一層厳しく、鎖でゆはへられるやうになつた上に、食物も喰べさせられなくなつて終ひました。ですから悲しさうに聲を出して、夜となく晝となく頻りに泣いてゐました。それが何だか、後悔したり、お詫を云つたりするやうに、人間には聞えました。然しルルにはなぜそんな目に逢はされるのか、本統はよくその意味が分りはしませんでした。

それから二三日して、御別荘の留守番が東京のお屋敷に來た時、その歸りにルルを連れて田舎に歸りました。東京のお屋敷が廣いと云つたつて、御別荘に比べれば箱庭のやうに小さなものでした。それほど田舎は廣々としてゐました。その上ルルはもう鎖などでつながれてゐるといふ事は決してありませんでしたし、どこへでも遊びたい處へ遊びに行かれるし、人間の子供のやうなあぶなつかしいお友達でない、本統の犬のお友達も出來たので大變に喜んで、益々丈夫な強い犬になりました。さうしてやがて近所近村での犬の親方になる事が出來ましたから、東京のお屋敷から追ひ出された事なんか、何んとも思はなくなつて終ひましたとさ。（をはり）

一の谷の合戰

窪田空穗

一

去年（壽永二年）の夏、木曾義仲が北國筋から攻め込んで來ると、平家はただもう慌ててしまつて、先代の淸盛からこの方住み馴れてゐる京都で、軍らしい軍を一つすることもできず、幼い安德天皇の御供をして、一門殘らず一しよになつて、攝津の福原（今の兵庫）まで逃げたのでした。そこには平家の邸があるので、落ちついて居たかつたのであるが、怖氣が附いてしまつたので、落ちつく程の氣にもなれず、たうとう船に乘つて海を渡つて、讃岐（四國）の八島までも逃げのびました。そしてそこの磯に假の御所を設けて、天皇を御據え申したのでした。心細い月日が續いて、今年の正月の御祝も、そこで型ばかりを行つたのです。

平家に取つては、思ひがけない幸が湧いて來ました。それは怖しかつた義仲と、氣味惡く思つてゐた賴朝と、身內同志で軍を始めて、そちらにばかり氣を取られてしまつてゐることでした。平家はその間に、四國から中國の十四ケ國を盡く自分のものにしてしまひました。そこから呼び集めた軍勢は、十萬騎といふ大軍でした。この上は、京都へ攻め上つて、源氏を追ひ拂つて、再び平家の世としよう、天皇ももとの御所へ御據え申さうといふ氣が起つて來ました。それには、こゝではいけない、もつと京都へ近い所へ移らうといふので再び船に乘つて海を渡つて、もとの福原へ戻つて來ました。そして一と先づ其所を足だまりとするつもりで、城を築きました。

平家の城は、この上もなく要害のいゝ所へできました。そこには後ろの方（北）は山で、しかも險しい山で、獸も下りては來られない位でした。敵は來られさうにもありません。前（南）は直ぐに海でした。そこには自分の方の大船小船が一面に浮んでゐました。こちらも敵の來る心配はありませんでした。この海と山との間の、細長い、そして廣い所が平家の城でした。それで、若し敵が攻めて來ても、東と西の口を防ぎさへすればいゝのですが、その口は何方も狹いので、防ぐには防ぎよい。攻めるにも攻めにくいのでした。東の口は大手（表口）で生田の森へ向つてゐました。西の口は搦手（裏口）で、そこは、北に背負つてゐる山がそちらまで續いてゐて、山越しに丹波の國の方へ行

く往還が、一筋あるだけなので、こちらは大手よりももつと防ぎやすくなつて居ました。

十萬の軍勢は、何時でも軍のできるやうに、馬には鞍を置いてある。弓には弦を張つてあつて、少しの油斷もありませんでした。そして城の中の高い所へは、平家の赤旗を限りなく立てておきましたが、その赤い旗が春の風に靡いてゐる有樣は、ちやうど空の上へ燃えあがつた大きな焰のやうに見えました。

四國、中國で、源氏に身方をする大名がある度に、能登守教經は攻めに行きました。六度攻めに行つて、六度とも勝つて歸りました。

『此の向きでは、再び平家の代になるのは遠いことではあるまい。』

宗盛初め、福原の城にゐる平家の重立つた者は、みんなさう思つて喜びました。京都の邊にゐて、平家を最負にしてゐる者も、同じ心持で喜びました。

二

義仲が戰死してしまふと、範頼と義經とは、兄の頼朝からいひつけられてゐる平家追討の軍にかかりました。

正月（壽永三年）の二十九日、二人は御白河法皇の御所へ伺ひ、平家追討の爲に西國へ向ふ由を申上げました。法皇は御許になつて、三種の神器（安德天皇の御持ちになつてゐる）の京都へ戻るやうにしろと御命じになりました。

二月の四日、二人の兄弟は勢揃をして、京都を立ちました。大手の大將は兄の範頼でした。梶原景時を初めとして、東國から連れて來た大名二十餘人を隨へて、その軍勢は五萬餘騎でした。搦手の大將は弟の義經で、これは土肥實平を初めとして、同じく畠山重忠、熊谷直實、佐々木高綱、武藏坊辨慶など、二十人ばかりを隨へて、その軍勢は一萬餘騎でした。二人は同時に京都を立ちましたが、範頼の方は眞直に軍を進めて、その日の夕方には、攝津の昆陽野、（福原の城を眼の前に見る所）へ行つて陣を取りました。義經の方はまはり道をして、丹波路の方へ向つて、道を急がせて進みました。

三

義經は、二日かかる道を一日で歩いてしまつて、その日の夕方には、丹波の國と播磨の國の境にある三草山の西の麓まで來ました。その山の東の口には、平家の軍勢が三千騎、資盛（重盛の子）を大將として守つて居ました。兩軍の間は三里離れてゐました。

その夜の宵に、義經は、土肥實平に相談を懸けました。

『何うだ夜討にしようか、明日の軍にしようか。』

それを聞いてゐた年若い田代信綱も側から口を入れました。

『平家は三千騎、此方は一萬騎、ずつと勝ち目です。明日になると平家の方の軍勢は增すかも知れません。夜討がいゝでせう。』

『よう云つた田代殿、誰もさう思ふことだ。』實平はさう云つて、『夜討が宜しいでせう。』

それを聞いてゐた軍兵は、

『何うしたらいゝだらう。この暗さでは。』

と當惑さうに云ひました。義經は實平に、

『いつもの大松明は何うだらう。』

といふと、實平は、

『いゝ考があります。』

と答へて、その邊の百姓家へ火を附けました。

續いて、野といはず山と云はず、木へも草へも火を附けたので、あたりは晝のやうに明るくなりました。義經の軍勢はその火光で、山を越して進みました

平家の方では、軍は明日のことだとばかり思つてゐました。

『軍は眠くては駄目なものだ。よく寢て置け。』

と云つて、後の方の陣の者は甲を枕にして眠つてゐると、そこへ俄に鬨の聲が起つたので、すつかり慌てゝしまつて、弓は持つたが矢は忘れる、矢を持つたが弓は忘れるといふ有樣でした。さうなると、馬に蹴られるのが怖さに、敵を避けて通すやうになつてしまつてさんざんに破られてしまひました。大將の警蹕を禦め立つた者は、極り

が惡さに、船で八島の方へ行つてしまひました。

四

三草山が敗れたと聞くと、宗盛は使を立てゝ、誰か其方へ向ふものはないかと、大將を順々に訊かせたが、誰も行かうといふ者がありませんでした。その使は能登守教經の所へも行きました。

『度々の事ですが、今度も又貴方がお出で下さるでせうか。』

さう云ふと教經は、

『軍は狩や漁の遊びではあるまいし、そんな、足場のいゝ方へは行くが、惡い方へは行かぬなんて云つて居た日には、勝てつこはない。何度びでもかまはん、強い者の方へは教經が參ります。引受けて一方は破つてお目に懸けます。御安心なさいまし。』

宗盛はその返事を聞いて喜んで、一萬騎を敦經に附けて、山の手の方へ、一の谷の向うの鵯越の方へと向はせました。

大手へ向つた範頼の軍勢は、五月一日は、敵を眼の前にして靜かに休んでゐました。こゝに陣を取り、かしこに陣を取りして、馬を休せたり、秣を食はせなどして急いだ風は見えませんでした。

そして夜になると、陣毎で篝火を焚きました。その火光は、夜は、出たばかり月の光のやうに明るく、明方には空の星のやうに見えました。

平家の方でも、生田の森で篝火を焚いて、そして、今にも寄せて來るか、寄せて來るかと思つて、落ちつけずに居ました。

五日の日の暮方になると、源氏はいよ〳〵昆陽野の陣を引拂つて、生田の森の方へと進んで來ました。

五

搦手の義經は、五日は一日一夜を休んでゐましたが、六日の朝になると、その一萬餘騎の軍勢を二た手に別けて、一と手は七千餘騎、土肥實平を大將にして、敵の城の搦手である一の谷の西の口へ向はせました。そして自分は、殘つた三千餘騎を一と手にして、一の谷の後ろの鵯越を下つて、敵を不意打にしようと思つて、丹波路から其方へと向つて行きました。

義經の軍兵は、その路もない鵯越を恐れました。

『こゝは評判な難所です。何うせ死ぬにしても同じことなら敵と戰つて死にたい。崖から落ちては死にたくないものです。誰か案内のできる者はないでせうか。』

さういふのを聞いて大將の一人の平山季重が進み出て云ひました。

『季重はこの山の案内をよく知つてゐます。』

義經は、

『お前は東國育ちの者だ、今日初めて見る西國の山の案内ができるといふのは、本當らしくない。』

『これはお言葉とも思ひません。吉野山の櫻は行つて見なかつたつて、歌人なら知つてゐませう。敵の籠つてゐる城の後ろの案内は、強い武士なら知つてる筈です。』

その時、別府清重といつて十八歳の若武者が進み出して云ひました。

『父の能重が敎へましたには、狩をする時でも、又敵に不意打をされた時でも、山で道を迷つたら、年寄馬の手綱を放して、先に歩かせて行け。馬はきつと道のある所へ出るものだと申しました。』

『いゝ事をいふ。實際昔から、雪は野原を埋めても、年寄つた馬は道を知つてゐるものだと云つてゐる。

義經はさう云つて、白い毛の年寄馬を先きへ立てゝ、知らない山路へ向つて行きました。

二月の初めのことなので、日當りのよい所は雪が消えかゝつて、殘つた雪が花のやうに綺麗で、霞のかゝり初めた谷では鶯の啼いてゐる所もありました。又高い所へ登ると、雪が一面に眞白にかがやいてゐ、下りて行くと、斷崖が、その肌をあらはして、ずつと深く續いてゐる所もありました。又日當りの惡い所は、木の上の雪も消えなくて、風が吹くと雪が梅の花のやうにこぼれて來る所もありました。

馬を急がせましたが、その日は山の中で暮れてしまつたので、みんな馬を下りて陣を取りました。

その夜、武蔵坊辨慶は、何所からか年寄を一人連れて義經の所へ參りました。

『あれは何者だ。』

『これは、この山にゐる獵師です。』

と辨慶は答へました。

『さうか。それでは山の案内はよく知つてゐるな。』

『存じなくて何う致しませう。』と年寄は答へました。

『さうだらう。こゝから平家の一の谷の城へ下りようと思ふが、何うだらう。』

『とても駄目です。三十丈の谷もあれば、十の岩もあつて、人間でさへ容易には通れません。まして馬など、思ひも寄らない事です。』

『さうか、さういふ所を鹿は通るか。』

『鹿は通ります。』

『それなら結構な馬場だ。鹿の通る位の所を、馬の通れないといふ筈はない。その路をお前が案内しろ。』

『私は年が寄りまして、何うにも駄目です。』

『お前に子供はないか。』

『ございます。』

獵師はさう云つて、十八になる若者を連れてまゐりました。

義經はその若者を家來にしました。父の獵師は鷲尾武久といふので、若者を鷲尾義久と名のらせることにしました。

夜明けを待つて義經は、この義久に案内させて三千餘騎を引連れて、鵯越の頂上へ登つてそして眼の下の谷を見下しました。

（つゞく）

ダリヤ

若山牧水

ダリヤ、ダリヤ
赤いダリヤ
大きなダリヤ

あたいの顔と
くらべて見たら

あたいの顔より
大きなダリヤ
眞赤なダリヤ

山六爺さん

（長篇童話）

沖野岩三郎

前號までの梗概　山六爺さんは、山の奥の奥の一軒家にお婆さんと犬のタロと一しよに住んでゐました。ある朝、裏山へ行つて見ると二疋の狼が、ぐう〜〜鼾をかいて寝てゐたので、爺さんは家から御辨當を容れる革袋と細引を持つて來ました。そして二疋の狼を縛つて了ひ、頭へはすつぽり革袋をかぶせて巧く捕へて了ひました。爺さんは其からまた裏山へ薪を切りに行きましたが、今度は鹿が一疋、角を薪に卷きつけて立往生をしてゐたので、これも易々と捕へて了ひました。其處で爺さんは、鹿とクロの頭にも革袋をかぶせて狼と一しよに半年程飼つてゐましたが、その内に皆なよく馴れて仲よく暮す樣になりました。

ある日の事、山六爺さんは急に武士になりたくなりました。自分ではもうすつかりなつた積りで、飼つてある鹿に跨り、村の方へ行きました。婆さんも紙の旗を持つて、クロや狼と一しよについて行きました。處が村の人達は、鹿に田畑を荒されたり、泥棒に物を盗られたりして大解困つてゐました。爺さんは、自分は武士だから救つてやらなければならないと思ひ、村人に、皆な來いと言つて、丘の上へ集めました。

四

山六爺さんは鹿の背から、ずらりと並んだ人達を見渡して數へて見ますと、丁度皆なで九十七人ありました。そこで爺さんは、

『皆さん、能く入らッしやいました。』と鹿の背で叮嚀に、おじぎを致しました。九十七人も、一度に皆な、九十七の頭を下げました。

『皆さんは、鹿や猪や泥棒に出られて、お困りでせうが、今晩から、ちッとも鹿も猪も泥棒も出ないやうにして欲しくはありませんか。と山六爺さんが言つた時、九十七人は一度に『どうぞ〜〜、さうして下さい。願ひます、願ひます。』と言ひました。

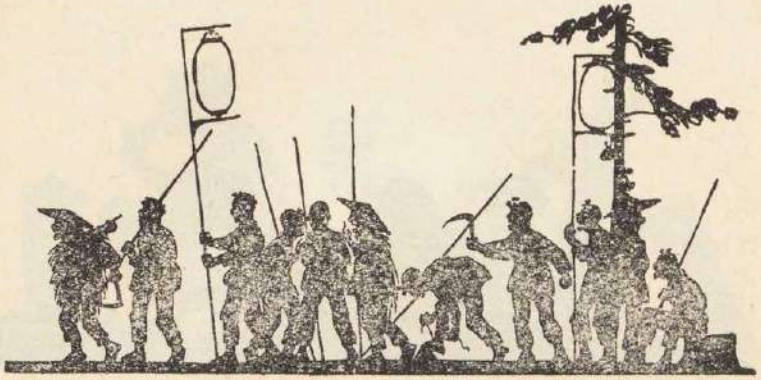
其時、山六爺さんは、『あゝ俺は大層腹が減りましたよ。』と言ひますと、婆アさんも、『私も大そうお腹が空きました。』と言ひました。黑も大きな口を開けて欠伸をしました。狼も革の袋の中で、小い欠伸を致しました。

夫れを見た百姓達は、早速

『では、殿樣、暫くお待ち下さいませ、唯今お辨當を此所へ持つて參りますから。』と云つて、四五人の若者は丘を降りて行きました。

間も無く若者は、大きな風呂敷に丸い團子のやうなものを包んで、もつて參りました。

『もうし〜〜、山六爺さんのお殿樣、お腹が空きましたなら、どうぞ、これなりとお食り下さいませ。』と云つて、一人の若者は、風呂



敷の中から、眞黑い**タドン**のやうなものを出して來ました。

『黑いネ、一體夫れは何の團子だ。』

『これはお蕎麥を粉に碾いたのでございます。蕎麥團子でございます。』

『さうか、夫れは有難い、一つ頂戴しよう。』

と云つて山六爺さんは其の黑い〳〵蕎麥團子を一つ食べて見ました。婆アさんも食べました。鹿も食べました。犬の「黑」も食べました。二疋の狼も食べました。

『旨しい、本當に旨しい。』と爺さんが言ひますと、婆アさんも『旨しい、本當に旨しい。』と同じやうに言ひました。

山六爺さんは、お腹が一杯になつたので、又行列を組んで丘を降りて家へ歸りましたが、家へ歸つても、其の黑いお蕎麥の團子の味を忘れませんでした

一日中、お腹を空かして村中を歩いて來たので、爺さんも婆アさんも、げッそり疲れて了つて、グウ〳〵と鼾をかいて寢込んでしまひました。「黑」も鹿も狼も寢てしまひました。

所が夕方になつて、不圖眼を覺してみますと、村の方で、お寺の鐘が、ゴーン、ゴーン、ゴーンと鳴り初めました。

『はて、何だらう？　火事か知ら？』と思つて爺さんは小屋の外に出て見ました。しかし火事らしい光りも見えません。けれども鐘はゴーン、ゴーンと鳴つてゐます。

『婆アさん、起きてらッしやい。村の方で鐘が鳴りますよ。何だらう？』と言つて山六爺さんは婆アさんを喚び起しました。

『ねエ、何でせう。』と婆アさんも眼を擦りながら出て來ました。

其時山六爺さんは、今日村の人達に、お蕎麥の團子を御馳走なつた事を思ひ出して、

『婆アさん、あなたは今日、村の人達にお蕎麥團子の御馳走になつたのを覺えてゐますかい。』と尋ねました。

『覺えて居ます、覺えてゐます、あの眞黑い團子を……』

『では、其の御禮をしなければならない、さア、村の人達は何でも大變な事が起つたのでお寺の鐘を鳴らして、多勢の人を集めてゐるのに相違ない。さア、御禮のかはりに、村の人達を助けて上げねば

ならない。』と爺さんが言ひますと、婆アさんは、

『あの旗を持つて行きませうか、あの紙旗を……』と言ひました。

『おう、旗をもつて來い、夫れから「黑」も狼も一緒に來い。』

と云つて、山六爺さんは小屋の中から鹿を引出して、ひらり！

と夫れへ乘りました。

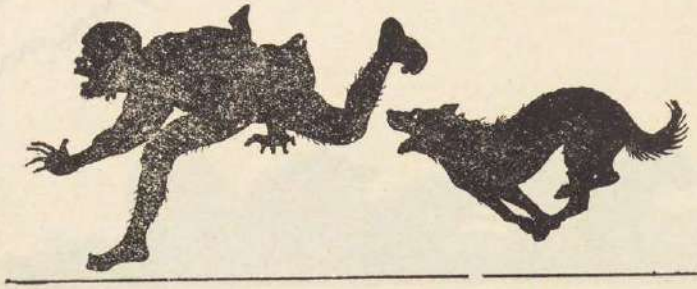
『物共續け』と爺さんは、武士のやうな言葉を使ひますと、婆アさんは、

『畏まつて候ふ。』と笑ひながら言ひました。夫れから「黑」と狼とをつれて、村の市へ、どん〳〵と駈けて行きましたが、村ではまだゴーン、ゴーン、と鐘が鳴つてゐました。

山六爺さんの行列が、鐘の鳴つてゐる、お寺の下まで來た時、お寺の庭から大勢の人達が、

『あゝ　お殿樣がお出でた、山六爺さんのお殿樣がお出でだ！』と云つて、ぴたりと鐘は鳴り止みました。

爺さんの馬……でない、鹿が、コト〳〵とお寺の庭まで來ますと、村で一番偉い庄屋樣が、其所へ出て來て、



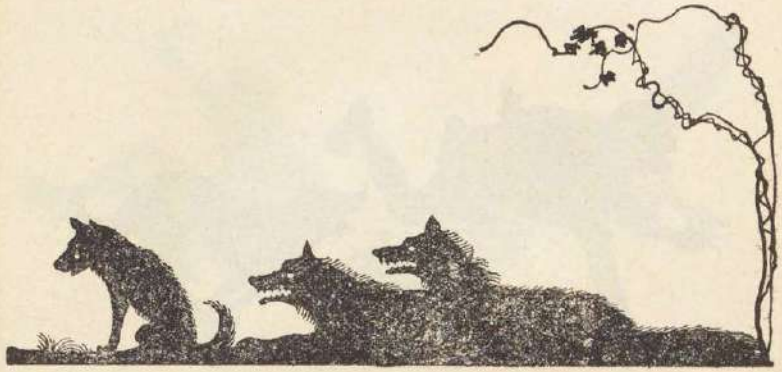
『これは〳〵、あなたは山六爺さまでございますか、よくこそお出で下さいました。實は此村に大變な事が起りまして……』とオジギをしながら言ひました。

『へェ、どんな事が起つたのでございまか。』と爺さんは鹿の角を撫でながら聞きました。

『外でもありませんが、近頃は泥棒が毎晩出まして、あちらの家で、お米を一合、こちらの家で、お麥を二合、向ふの家で、お襦袢が一枚、裏の家で手拭が一筋といふやうに、盜まれるのです。だから今晩は其の泥棒を、取ッ摑まへようと思つて、お寺の鐘を鳴らしてこんなに村中の人を集めたのでございます。』と云つて庄屋樣は、山六爺さんにオジギを致しました。

其の話を聞いた山六爺さんは、にッこり笑つて、

『あゝ宜しい宜しい。では皆さん方は、これから、お家へお歸り下さい。そして皆な戸を閉めて外へ出ないやうにして下さい。明日の朝までに屹度其の泥棒を、取ッ摑まへてお目にかけます。』と申しました。



『有難うございます、では、どうぞ宜しくお願ひ致します。』と言つて庄屋様は百姓達を伴れて寺を引上げて歸りました。

そこで山六爺さんは、お寺の本堂の縁側に腰を卸して、ぢッと考へてゐましたが、夜中頃になつて、爺さんは二疋の狼の口に篏めてあつた革の袋をとつてやりました。そして人間に物言ふやうに斯う言ひました。

『おい、狼よ。お前達はこれから村中を駈け廻つて、若しも泥棒に出逢つたなら、夫れを追かけて行け。けれども決して咬みついたり怪我をさせてはならないぞ。』

と言ひ聞かせました。

其の話を聞いてゐた「黒」もクン〳〵と鼻を鳴らして、『私も行きたい』と云ふやうな身振をしました。

『黒も行きたいか、では行つてお出で。』

爺さんは、黒の頭を撫でゝやりました。そこで二疋の狼と「黒」とは三方へ分れて村中を、ぐる〳〵と駈け廻りました。

村の人達は皆な雨戸を閉めて、家の中へ閉ぢ籠つてゐましたが、

あちらの方で、狼がウーウ、と恐ろしく吠え、こちらの方では犬がワン〳〵と、けたゝましく吠え、そちらの方でも、少し小い聲で、狼がウーン、ウーン、と唸り出しました。同時に『きやーッ！』と人の泣聲も聞えました。

皆な家の中で、何事だらうかと思つて其の聲を聞いてゐましたが、曙る朝太陽が東の山からキラ〳〵と輝いて出た時、村の人達が戸を開けて表へ出て居ますと、昨日山六爺さんに、お蕎麥の團子を上げた、小高い丘の上の松の木に、人間のやうな黒いものが幾つも幾つも、ぶら下つてゐるぢやありませんか。

『何だらう？』と言つて、皆なが其所へ走つて行つて見ますと、松の木の根の所には、恐ろしい狼が二疋と、「黒」とが、きちんとお行儀よく坐つて、木の上の人達が降りて來ないやうに張番をしてゐました。

そこへ山六爺さんは、鹿に乘つて駈けつけて來ました。

『さア、皆さん御安心なさい。泥棒はあの通り、松の木の上に追ひ上げてありますから。』と云つたので、村の人達は、初めて夫れが泥棒だといふ事を知りました。

山六爺さんは、松の木の下に行つて、
『泥棒さん、泥棒さん、こゝへ降りていらッしゃい。』と優しい聲で言ひますと、木の上に追ひ上げられてゐた十八人の泥棒は、ぞろ〳〵と木の上から降りて來ました。
『泥棒さん、お早うございます。』と婆アさんも申しました。
すると、泥棒は皆な地べたへ頭を、すりつけて、
『お殿樣、山六爺さまのお殿樣、もう、これから、ちッとも惡い事は致しませんから、どうぞ〳〵生命だけは、おゆるし下さいませ。』
と云つて、べこ〳〵頭を下げました。
爺さんは、から〳〵と笑つて、
『もうし〳〵、泥棒さん、私は何にも出來ない年寄りの爺さんです。あなた方を其の松の木へ追ひ上げたのは、其所に居る「黑」といふ犬

と、二疋の狼です。だから生命を助けて欲しゝなら、其の犬と狼とにお賴みなさい。』と申しました。
そこで泥棒達は、犬と狼との前へ座つて、
『犬樣、狼樣、どうぞ御免下さいまし。』と何度も〳〵頭を下げて願ひました。
村の人達は、其の泥棒の、平あやまりに、あやまつてゐる樣が、あんまり可笑しかつたので、皆な一度に、ワハハ、、、と笑ひました。爺さんも婆アさんも一緒に笑ひました。
そこで、爺さんは村の人達に向つて、
『もう、泥棒さんは、狼にも犬にも、あゝして、あやまつたのですから、此のまゝ赦してあげて下さい。』と申しました。
皆は笑ひながら、『宜しい〳〵赦してあげます。』と云つたので、泥棒も、あんまり嬉しかつたと見え、十八人皆なが一緒に、
『有難い〳〵』と言つて、矢張り笑ひました。皆なが斯うして笑つてゐる所へ、山の下から庄屋樣が立派な大小を腰にさして、登つて來ました。（つゞく）

金魚

田山花袋

ある時に、多喜子は兄さん達に言ひました。

『この金魚何うするの？』

これから寒くなるのに、本當に金魚は何うするんだらうと多喜子は思つたのでした。そこには、小さな池がありました。それは、夏の頃に、たゝきやさんの使ひ殘したたゝきがあつたので、それで兄さん達の拵へたものでした。夏の中は、そこに金魚が泳いでゐるのが何んなに美しかつたでせう。またそれが何んなに幼ない喜多子の眼を喜ばせたでせう。ある時はそこに美しい日影がさし込みました。ある時は、花がそこに綺麗な影を涵しました。從つて、そこに泳いでゐた金魚も、朝と晩にそれを眺めた多喜子も、かうした寒いさびしい冬がやつて來るとは思ひもかけないのでした。

今はもうその小さな池は、落葉で埋められるやうになつてゐました。それに、此頃では、兄さん達も構はなくなつて了つたので、池のたゝきは剝げ、水のあるところは少くなつて、とても、これでは金魚は棲んでゐられさうにも思はれませんでした。多喜子はそれが心配で爲方がなかつたのでした。

『本當に、何うするの？兄さん』

『このまゝにして置くんだよ』

かう中兄さんは、平氣で言ひました。

『だつて、それぢや、冬が來て、水と一緒に金魚も氷つて了ふは』

『大丈夫だえ！』

中兄さんは、平氣でした。池を覗いても見ませんでした。

段々寒くなつて來ました。霜が屋根に白く置くやうになりました。多喜子は心配で、心配で、爲方がなかつたですけれど、何うすることも出來ませんので、少い水の中にさびしさうに、窮屈さうに、六疋の金魚の泳いでゐるのを毎朝覗いて見ては、そのまゝ學校に行きました。

ある日のことでした。父さんが奥からそこに出て來ました。そして大きい方の兄さんに言ひました。

『おい、おい、金魚はあゝして置いて大丈夫かな。氷つて了ひはしないか』

『大丈夫でせう』

大きい兄さんは、かう言ひました。

『でも、氷ると、たゝきは、皆な駄目になつて了ふぜ　…。』父さんは下駄を突かけて下に下りて、小さな池を覗きました。『ヤア、これは水が少ない。氷ると金魚も一緒に氷つて了ふ……。水を入れて置てやれ、水を――』

これを榜で聞いた時には、多喜子は初めてホッと安心しました。

大きい兄さんは、バケツに水を汲んで來て、そしてそれをサアとその小さな池に入れました。

仲兄さんもそこに來てゐました。

『駄目だな、これは？』

『駄目だ……洩つちやふな――』

こんなことを二人は言つてゐました。

『まあ、洩つても好いから、時々、水を入れてやれ……。水がなくつちや、金魚だッてたまらない』

かう父さんは言ひました。

それからは、父さんが度々氣をつけて呉れますので、多喜子もさう金魚のことを心配しなくともよくなりました。冬は益々深く寒くなつて行きました。手水鉢の水も厚く氷るやうになりました。大きい兄さんは、小さな池の上に、氷らないやうに、菰や筵などをかけてやりました。

『大丈夫だよ。いくら少くなつても、あれよりは水は減りやしないんだから……。』

かう大きい兄さんは言ひました。

年の暮が來ました。つゞいてお正月が來ました。家の内にも、炬燵があつたり、旨いお餅があつたりして、冬でも春のやうでした。母さんが一度風邪をひきましたけれど、それもぢきに治つて了ひました。外には、寒い風が吹いて、學校に行くのは辛う御座いましたけれども、それでもいつも元氣に多喜子は出かけて行きました。ある朝起きて見た時には、お庭には雪が一杯に眞白に積つてゐました。小さな池も全くそれに埋められて了つてゐました。金魚はどうしたか、生きてゐるか、死んでゐるか、それさへ知ることが出來なくなりました。

縁側に出て來た父さんは言ひました。

『金魚は何なだな、生きてるかな？』

『生きてる、生きてる』

かう其處にゐた仲兄さんが言ひました。

『見たのかえ？』

『え、見ました、さつき……』

『水は氷りやしなかつたか？』

『大丈夫です』

しかし雪はそれからも何遍も何遍も降りました時には何うしてももう金魚は駄目だと思はれるやうなことも御座いました。お勝手の流しの手桶の水さへ氷るのですもの！　もうとてもあの小さな池は氷らずにはゐるもんですか。

しかし、さうしてゐる中にも、何處からともなく次第に春がやつて參りました。もう冬の寒いのもいつの間にか通り越して了ひました。

ある日は、大きい兄さんが菰をまくつて池を見てゐました。

『ヤア、まだ生きてらア？金魚はー。丈夫なもんだな』

『さう？　生きてゝ？』

かう言つて、喜ばしさうにして、多喜子は其處に走つて行きました。成ほどそこには金魚は泳い

た。庭には、早咲の梅が白く咲いてゐたり、沈丁花の匂ひがあたりに際立つて漲つてゐたりしました。日の光も全く春になりました。垣の日當の好いところには、草が萠え出してゐました。

ある日、父さんは、大きい兄さんや、仲兄さんに言つてゐました。『たゝきをもう少し買つて來て池を拵へ直すんだね……。あれぢや、折角、冬の艱難を凌いで來た金魚が可哀相だ……。ひとつ新しい水の多い池を拵へて、十分に泳がせてやらなけりゃ——』

『本當ね、お父さん』

かう多喜子も言ひました。兄さん達は新しい池をつくるために。——艱難を凌いで來た金魚を入れるための新しい池をつくるために、そのまゝ揃つて、町にたゝきと砂とを買ひに行きました。

（をはり）

でゐました。

『一疋も死なない？』

『あゝ、黑がゐないかな？……、いや、ゐる、ゐる。すつかり泥だらけになつて了つたんで、ちつともわかりやしない。赤いんだつて、汚れてきたなくなつてるア』

『隨分、苦しかつたのね？』

かう多喜子は同情するやうに言ひました。つゞいて、『でも、もう、大丈夫だ。もう、春になりましたものね……。もう、氷ることなんかわね』

『もう、大丈夫だ』

『まア、好かつた、金魚が死なないで……』

かう胸を叩くやうにして言つた喜多子は、あの雪に埋れた時のことなどを思ひ出してゐるのでした。

もう三月でした。桃の節句もとうにすぎました

不思議な樂の音

前田晃

ある所にティムといふ跛の靴直しがありました。ティムは靴を上手に直す外に胡弓を彈くことが大層上手で、其の界隈には誰も及ぶものがありませんでした。所が、ティムに就いて不思議な噂が傳はつて居りました。それは綠の國の精達と親しく交はつてゐるといふのです。それといふのは、ティムがよく滿月の夜に、小山の中で、ぢつと星を眺めてゐたり、草の間をそよ〳〵と吹いて來る風に耳を傾けてゐたりしたからです。

さてある晩のことです。ティムが自分の小屋で貧しい晩飯を食べかけてゐますと、御殿へ奉公にあがつてゐる妹のノラが、不意に尋ねて來まして、おい〳〵と悲しさうに泣きました。

『ど、どうしたんだ、ノラ？』とティムはびつくりして尋ねました。

『兄さん、わたしもう胸も何も張り裂けさうです』とノラは泣きながら答へました。『今朝御殿で奥さまがお目覺めになつて見ると、金の腕環が失くなつてゐてありません。いくら搜しても、どうしたのかそれが見つかりません！それで奥さまはわたしが取たに違ひないと仰有るのです。わたしの外には誰もお部屋にはひつたものがなかつたものですから。それでもし明日の朝までに見つからなければわたしは牢屋へ行かなければなりません。』

『牢屋へ行く？』とティムは目をまるくして叫びました。『そんな、そんな馬鹿な話があるものか！この美しい可愛い娘のお前が！何の罪もないのに牢屋へ行くなんて。』

『だつて、だつて行かなければなりませんの、腕環が見つからなければ、』とノラは啜り泣きました。『ねえ、兄さん、わたしどうしたらいゝでせうか？どうしたらいゝでせうか？』

さう言はれて見ると、ティムもまたノラと同じやうに胸が張り裂けさうになりました。けれど、ど

うしやうがありませう！いくら腕組をして考へて見ても、何の思案も浮びません。二人は暫くの間默つて向ひ合つて居りましたが、やがてノラは絶望したやうに、とぼ〳〵と御殿の方へ歸つて行きました。後でティムは、頭を手で支へて、ぢつと目を瞑つたまゝ、晩飯も何も忘れて居りました。

するとやがてのことです。戸をぽと〳〵と叩く音が聞えました。

『どなたですか？おはいりなさい。』とティムは頭をあげながら言ひました。

『はいつては行けないの。』と小さな震へる聲が言ひました。『ティムさん、どうぞ直ぐに來て下さい。わたしはお迎へにあがつたのです。』

『おゝ！さうですか。だがわたしは今夜はそれどころぢやありませんよ。』とティムはぢつとしたまま言ひました。『今夜、どうしてもわたしが行かなければいけないのでもないでせう？』

『いゝえ、』と震へてゐる小さな聲が言ひました。『どうでも來て下さらなければ、わたし達が困ります。わたし達が踊ることが出來ません。』

そこでティムは止むを得ないといふやうに立ちあがつて、胡弓を持つて、戸を明けました。と月の光が上げ潮のやうに白々と漲つて流れ込みました。見ると戸の外の埃の上に二つの小さな跳足の足痕がついて居りましたが、目に見える者は誰も居りません。たゞ向ふの路の方から、同じ小さな震へるやうな聲が聞えて來ました。

『ティムさん、早く、早く來て下さい。』

それを聞くと、ティムは見えない絲で引かれるやうにさつさと出掛けました。跳足の足の痕は前へ〳〵と行つて、間もなく青々とした草原の上まで行くと、まるで火の足音のやうにぱち〳〵と火

花を散らしました。そしてたうとうティムは、淋しい眞黑な湖の側の芝生まで導かれて來ました。と其處に、綠の着物を着て眞赤な帽子をかぶつた綠の國の精達が、みんな、ティムに胡弓を彈いて貰つて踊り初めようと待ち構へて居りました。

これはティムに取つて大變光榮なことでした。ティムは其のそばまで行くと、早速彈き初めました。そして一生懸命に巧く彈きました。綠の國の精達は踊り初めました。そしていつまでも踊つたり歌つたりして居りました。夜は次第に更けて行きました。そしてたうとう、月が高い山の端に沈みかゝるまでになりました。〳〵と其の時、何處か遠くの方で、角笛の音が微かに響き渡りました。すると綠の國の精達は、まるで燕が飛び走るやうに一齊にすつと飛んで、何處へか行つてしまひました。

でティムが、自分獨りになつたと思つた時でした。ふと小さな聲が自分の肱の所で聞えました。振返つて見ると、其處に、奇妙な恰好をした可愛

らしい小さな人が一人、手をヅボンのかくしに入れて、丸い石に凭りかゝつて居りました。

『ティムさん、』と其小さな人が言ひ出しました。『有りがたう。今夜の胡弓は殊に結構でしたよ。それでお禮を差上げたいと思ひますが、何を差上げたらいゝでせうか？欲しいと思ふものを仰有つて下さい。』

『では遠慮なく申しますが、』とティムは言ひました。『どうぞ御殿の奥さまの腕環のある所を敎へて下さい。さうすればほんたうに難有いと思ひます。』

『はてな！そいつは少し面倒だな、』と小さな人は其の黑水晶のやうな目をぴか〳〵光らしながら言ひました。『ぢやかうしませう。先づ最初に、新らしい曲を一つ敎へて上げませう。さうすれば自然と分りませうから。』

『さう言つて小さな人は、ポケットから、まるで麥藁のやうな管を一本出して、それを唇に當てました。と瀏亮たる樂の音が、まるで眞珠の雨のやうに其の管からこぼれ出しました。

ティムがうつとりとそれに聞き惚れてゐますと俄に、空では星がぐる〳〵とまはつて踊り出す！風は何處からともなくティムの耳許にそよ〳〵と囁きながら吹いて來るし、山といふ山はみんなガラスのやうに透き通つて、胸といへば今にも肋骨をはね飛ばしはしまいかと思はれるほどに大きく膨みました。と、それと同時に、子供時代の考といふ考へ、夢といふ夢が、すつかり心に浮んで來ました。そして失くしたものや忘れてゐたものがすつかり目に見えて來ました。其の中に御殿の奥さまの腕環もありました。

『あッ！』とティムは思はず喜びの叫びを擧げました。と、其の途端に、ゆら〳〵とした眞暗な物がさつとティムの上を掃いて通りました。と、それきりティムは氣を失つてしまひましたが、やがて正氣に返つた時には、顏に朝日が眩しく當つて居りました。

ティムは起きあがつて目をこすりました。

『夢だつたのか知ら？』

ティムは自分にさう呟いて、あたりを見まはしました。所が、確に、さうぢやありません。なぜなら、其處は淋しい湖のほとりであつて、昨夜綠の國の精達が踊つた綠の芝生がちやんと其處にありましたから。と思ふと同時に、ティムは、ぱつと電のやうに腕環の事を思ひ出しました。

『おゝ、さうだつた。』

ティムは、かう自分に言つて、直に跛を引き〳〵、いくつかの小山を越えて御殿の方へ急いで行きました。

そしてやつと其處に行き着いて見ますと、丁度門の所にノラが悲しさうに泣いて居りました。そばには一人の男がノラを牢屋へ連れて行く爲めについて居りました。

『待つて下さい、待つて下さい！』とティムは聲をかけました。『わたくしが腕環のある所を存じて居ります！』

『あなたが？』とノラのうしろの方に立つてゐた大勢の者が叫びました。その人達はみんなノラを愛してゐたので、別れを告げに出て來てゐたのでありました。

『さうです。わたくしか存じて居ります。』とティムは言つて、ずん〳〵奥さまの部屋の方へはいつて行きました。ティムは一度も其處に來たことなどはなかつたのですが、不思議によく其の道を知つて居りました。そして窓の所まで行くと、ティムは樫の木の板で張つた床の一つの穴を指さしました。

『腕環はあすこにあります、』とティムは言ひました。『どうぞ板をはがして見て下さい。』

で早速大工を呼んで、其の板をはがさせて見ました。すると果して腕環は、其の板の下に、まるで小さな金の蛇のやうにまるまつて居りました。それは締金が外れて、奥さまの絹の着物をすべつて落ちた拍子に、する〳〵と穴の中へ落ち込んだのでありました。もしティムがそれを知らさなかつたら、腕環は永久に其處に其のまゝ止まつてゐたのでありませう。

おゝ！いかにみんなの者が喜びの聲を擧たことか！みんなが可愛い美しいノラを愛してゐたので牢屋へなと誘もやりたいとは思つてゐなかつたからです。奥さまもノラに疑ひをかけたことを大變に濟まなかつたと言つて、心からノラにお詫を言ひました。

所が、更に一層よかつた事は、ティムが其の新らしい曲を忘れてゐなかつたことです。で、それからといふものは、何か物が失くなつたりしますと、ティムは滿月の夜に、例の淋しい湖のほとりへ出かけて行つて、其の曲を奏でます。すると空では星がぐる〳〵とまはつて踊り出す！、山といふ山はガラスのやうに透き通つて、そしてティムは人間の目に見えない忘れた物の世界を見通すことが出來ました。

けれどティムは、いくら其の失くなつた物を見つけてやつても、決してお禮は取りませんでした。といふのは、かういふ不思議な國の秘密を、人間の世の金で賣ると、其の人は忽ち持つてゐる力をみんな失くしてしまふからです。（をはり）

清坊と三吉

吉田絃二郎

或る湖に近く高い山寺がありました。その山寺の鐘は、風ぎの時は七里四方も聞えると噂されてゐました。

清坊は、その山寺の鐘樓守のお爺さんのたった一人の孫でありました。清坊のお父さんも、お母さんも、清坊が生れて間もなく死にましたので清坊は世界にお爺さん一人を頼りにして成長しました。

清坊は朝も晩も、お爺さんが撞く鐘の聲を聽いては、大きくなって來たのでした。

『僕もいまに大きくなったら、お爺さんのやうに鐘をついてやるぞ！』

清坊は鐘樓の下から、鐘を撞いてゐるお爺さんを見上げては、さう思ふのでした。

けれどもお爺さんは、なか〳〵清坊に鐘を撞かせませんでした。

『ねえ、お爺さん、僕にも鐘を撞かせて下さい。』

と清坊は一日に幾度もねだるのでした。

『ばかを言はつしやい。お前はまだ小ひさいから撞けない。鐘の數一つ撞きそこねても大變なんだから嘴！』と言って、お爺さんは少しも鐘を撞かせてくれませんでした。

清坊が八つになった年の春でした。冬の寒い間を、夜遲く起きて鐘を撞いたせいか、お爺さんはこのころになって骨節々が痛んで、鐘樓の階段を昇り降りするのさへ、たいへん難儀なやうに思はれました。

『お爺さん、今度は僕に鐘を撞かしておくれ！』

清坊はお爺さんのいたいたしい風を見てゐるにしのびないで、さう言ひました。

お爺さんは、はじめのほどは、何うしても聽きいれてくれませんでしたが、おしまひには自分の足腰が立たなくなったので、やっと清坊に鐘を撞くことをゆるしてくれました。

清坊がはじめて鐘を撞くのだからと言って、山寺の和尚さんは清坊に小ひさな黑い法衣を一枚拵へてくれました。

清坊は、うれしくてたまりませんでした。

『宜えかな、鐘樓に上る時は、和尚さまが佛さまの前にお坐りなさるやうな心持で行くのだよ。撞木を握って鐘の前に立った時は、自分の心をお月さまのやうに清くして撞くのだよ。心が曇れば、

鐘の音まで曇つて來る……』

お爺さんはさう言つて、清坊を鐘樓に上らせてやりました。

×

清坊はその日の眞夜中の鐘を、はじめて撞くのでした。

清坊は和尚さまにいたゞいた黑い法衣を着て、鐘樓の階段を昇つて行きました。かすかな月の光のなかに、花が白く咲いてゐるのが見えました。高いお山の寺なので、夜はまだなか〳〵寒くありました。清坊はお爺さんに敎へられた通りに自分の心を淸めて、鐘の前に立ちました。

滿身の力をこめて、鐘を撞きました。

ゴーン……ゴーン……ゴーン……

鐘の聲は夜の空を靜かに湖の上につたはつて行きました。

×

清坊が心を淸めて、鐘樓で鐘を撞いてゐる時でした。湖の上を、一艘の舟が岸から遠く離れて、沖へ沖へと隔つて行きました。その舟の上には、湖の岸の農家に生まれた三吉といふ若者が乘つてゐました。

若者は年寄つたたゞ一人の母親と、貧しく暮らしてゐたのでしたが、田舍では幾ら働いてもお金持になれませんでしたので、今夜おつ母さんを拾てゝ、こつそり湖をわたつて向ふ岸の鑛山に逃げて行くつもりだつたのです。

三吉は舟を漕ぎ出しては、振りかへつて岸の方を見ました。何にも知らないで眠つてゐるたつた一人のおつ母さんの家の窓からは、小ひさな燈がちら〳〵と、戸外へ洩れてゐました。

三吉は、そのかすかな燈を振りかへつて見ては泣きました。それでも舟をぐん〳〵沖の方へ漕いで行きました。

湖の上には霧がかゝつて、間もなくおつ母さんの家の窓の燈も見えなくなりました。

三吉はやつと思ひ切つて、沖へ沖へと舟を漕ぎました。

×

一里ばかりも舟を漕いでからでした。

ゴーン……ゴーン……ゴーン……と清坊の撞いてゐるお山の寺の鐘が、湖の上を靜かにひゞいて來ました。

三吉は昨夜までおつ母さんと二人つきりで、爐の火を焚きながら、鐘の聲を聽いてゐたことを想ひ出しました。

おつ母さんが今夜はたゞ一人で、あの鐘の聲を聽いてゐなさるかも知れぬと思ふと、何うしても歸らないでは居られないやうになりました。

それでも三吉は『おつ母さんは、今日は麥畑で働いて疲れてゐんでだつたから、きつと眠つてゐて、鐘の音なんかお知りにならないかも知れないッー』と思ひ直して、また舟を沖の方へ漕ぎ出しました。

ゴーン……ゴーン……ゴーン

と、清坊が撞いてゐる鐘の音が、再び湖の上に聞えてまゐりました。

『おつ母さんが眼をさまして、私が居ないので、あの鐘の聲を聽きながら、何んなに泣いてゐらつしやるか知れない。』

三吉はさう思つて、舟を漕ぐ手をちよつと止めました。

けれども直ぐ『おつ母さんは疲れて眠つてゐらつしやるにちがひない……』と思ひ直して、三吉

はまた舟を沖の方へ漕ぎました。

ゴーン……ゴーン……ゴーン……

清坊が撞く鐘の聲が三度、湖の上を靜かにひゞいて來ました。

『やつぱり駄目だ、あんなに鐘が鳴るんだもの、おつ母さんは眼をさまして見て、私がゐないので泣いてゐらつしやるにちがひない……』

三吉はさう思ひました。そしておつ母さんのことを思つて泣きました。何してもおつ母さんを捨てて、旅に逃げて行くことはできなくなりました。

三吉は舟をぐるりと廻してしまつて、一生懸命に岸の方へ舟を漕ぎもどしました。霧のなかゝらおつ母さんの家の窓の燈が、だん〳〵明るく、大きくなつて、近よつて來ました。三吉は岸に飛び上つて、おつ母さんの家に歸つて行きました。

おつ母さんは眠りもしないで、爐に火を焚いて三吉が歸つて來るのを待つてゐました。

『おつ母さん！勘忍して下さい。』

三吉は土間から飛んで行つて、おつ母さんの胸にすがりついて泣きました。おつ母さんは何にも言はないで、優しく三吉の背を撫でゝやりました。

×

ゴーン……ゴーン……ゴーン……

清坊はしばらく鐘を撞いて、鐘樓から降りて來て、お爺さんのところに行きました。

お爺さんは寐ないで、爐のなかに焚火をしながら、清坊を待つてゐました。

『おう、善く撞けた。たいへん善い音に響た。寒かつたゞらう喃！』と言つてお爺さんは冷たくなつた清坊の手をごし〳〵とこすつてくれました。

清坊は幸福に輝いた顏をして、お爺さんと一緒に眠りました。（をはり）

ちやぼ

磯部節治

紅美子さんの伯父様のところに、一番の矮鶏が飼つてありました。身體が小さくて格構好く、總毛は眞綿の樣に軟かで、雪の樣に眞白でした。紅葉の樣な形をした眞紅な鶏冠は、惋で一面の雪の中に咲いてゐる紅い花の樣に美しく見えました。

どちらも大變温和しくて、雄鶏は朝の時をつくることを決して怠けず、雌鶏はよく玉子を生みました。そしてその歩き振りと氣どり振りとはほんとに滑稽で可愛らしう御座いました。その熊手の樣な足を擧げては前に伸ばして、如何にもゆつたりと、一歩毎にその寢ぼけた樣な頭の振り方をしてゐる樣は、どんな氣むづかし屋が見てもふき出すほどでした。で、大變伯父様や伯母様に可愛がられてゐました。

紅美子さんは、また特別にその矮鶏が好きでした。學校の行き歸りにはきつと伯父様のところに寄つて矮鶏と遊ぶのを、毎日の日課の樣にさへしてゐました。

ところが今度、伯父様の一家が、臺灣においでになつたので、その矮鶏を紅美子さんの家に貰ふ事になりました。紅美子さんの喜びはまあどんなでしたらう。伯父様のところから貰つた鶏屋は、古びて汚れてゐましたので、紅美子さんは、早速お父様にお願ひして、新しいのを造つて戴きました。そしてその掃除には、きつとお父様やお母様の御手傳をしました。三度の餌をやる事や、垣の外に出さない事や、犬や猫にさらはれない事など、皆紅美子さんが、學校のお余暇にする事に致しました。

その中に矮鶏は丸羽の籬子を孵しました。俄かに數の殖えたのと、雛子のピヨピヨピヨと云ふ喧しい聲とで、紅美子さんの家は大變賑かになりました。紅美子さんは朝から晩まで、雛子とピヨピヨと云ふ聲を聞いてゐると、心は躍る樣に嬉しくなりました。樂しい樂しい幸福な日が毎日續きました。

斯うしてだん〳〵個ひなれて行く中に、なんとなく物足らない樣なところを、紅美子さんは感じました。といふのは紅美子さんがこれほどまでも可愛がつて、大切に大切にしてやつてゐるのに、矮鶏の方ではちつとも紅美子さんになつかない事なのです。たとへば、紅美子さんが學校から歸つて來て、すぐ鶏屋の中を覗きに行くと、雛子は何か惡魔にでも嗾かれた樣にピヨピヨと、如何にも恐ろしさうに啼き騒ぐのでした。また玉子を鶏屋にとりにゆくと、親鶏は大きな聲をたてゝ啼き叫んだり、此の盜棒奴が、と云ふ樣な眼つきをして紅美子さんを睨めたりしました。紅美子さんは、その眼つきが大嫌ひでした。いつの時でもその眼つきに出遇ふと、紅美子さんはハツとしま

一休和尚と筍（繪話）

㊀ある時、一休和尚のお寺の竹が垣根を越して、隣りの蜷川新左衛門と云ふ武士の邸の庭へ首を出しました。新左衛門もまらひ武士でしたから、なんとか一休に問句を云はれない樣にそれを取つてやる方法はないものかと考へました。

㊁なにを考へついたか、刀の下げ緒で襷をかけ、大刀を引き拔いて、「他人の邸へ無斷で入り込むとは不屈千萬な無禮者め、手打ちにいたす故覺悟をいたせ」と云つてすつぱり。

した。それはほんとに親しみのない、疑ひ深いひねくれた眼でありました。紅美子さんは、あの眼つきは人間のする眼つきではないと思ひました。禽や獣だけがする眼つきだ、と思ひました。

『こんなに可愛がつてやるのに、何故鶏はあんな嫌な眼つきをするのだらう。』

と、考へても、どうしても紅美子さんにはそれがわかりませんでした。

桃の花の咲く頃の、ある日の事でありました。朝から空がはれ渡つて、お陽様がほか〳〵と温い光りを、下界の者に恵んでゐらつしやいました。

雌鶏は九羽の雛を随へて、如何にも愉快さうに、嬉しさうにクック、クックと啼きながら、お庭のあちらこちらを例の滑稽な可愛い歩き振りで廻つては、餌をあさつてゐました。雛子もピヨピヨと小さい自慢一つぱいの啼聲をあげて、これも嬉しさうに雌鶏の前や後や横を走り廻りました。そして餌を見つけては、小さいのが爭つて、金切聲をたてゝ騒ぎました。その度に、遠くに距れてゐた雄鶏が、例の寝ぼけた様な頭の振り方をして、雛子の方を見るのでした。可愛い子供達の方を、何事が起つたのかと思つて心配したのでありませう。

お庭の南の隅によつて、桃の木が三本ばかりありました。花は今が盛りで、綺麗に咲き倒れてゐました。その木の廻りには、青芽をふいた芝草が、ほか〳〵と照るお陽様の光りをうけて、敷蒲團の様に温まつてゐました。お庭の散歩に疲れた雌鶏は、そこまで來ると、スツクと伸び上つて、一つ羽搏きをしました。すると方々に散らばつてゐた雛子は、ぱた〳〵と小さなお尻を振つて、集つて來ました。すると雌鶏は両側の羽根を精一つぱいに擴げました。雛子の二三匹がその中に潜り込みますと、雌鶏は静かにそこに坐りました。他の雛子もその圍りに、小さく眞圓く坐りました。

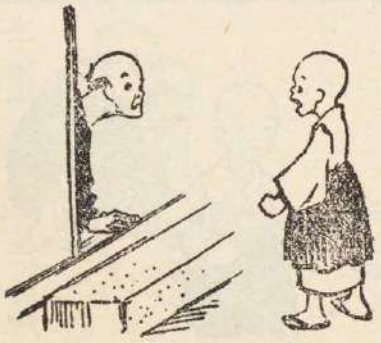
やがて雄鶏もそこにやつて來て、少し距れて坐りました。暫くすると親鶏の眼が半分つむつて、白く皮をかむりました。ピヨピヨの聲もだんだんなくなつて行きました。

紅美子さんはその時、暖い南の様に出て、猫りで日向ぼつこをして遊んでゐました そして時々詩を歌ひました。

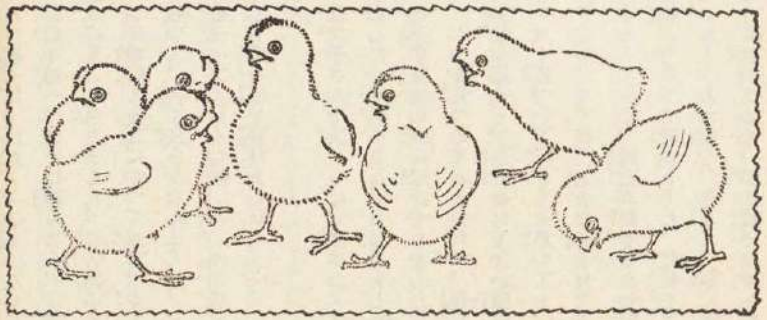
紅美子さんの胸一つぱい擴げた、美しい詩の聲が、長閑な庭の隅々にまで流れて行きました。紅美子さんは自分の美しい聲に、恍惚と聞き入つてゐましたが、ふと桃の木の下の芝生の方に眼をやりました。そして鶏の群を見つけ出すとにこ〳〵と微笑んで、じつと見つめてゐましたが、暫くすると、何を思ひついたのか、庭にそつと下りて下駄を履くと、足音をたてない様に、鶏の方に近づいて行きました。しかし、いくらソツと近づいて行かうと思つても、庭下駄が紅美子さんのお足には大き過ぎるものですから、すぐに、大きな音をたてゝしまひました。

するとすぐに、雄鶏が眼をさまして先づぢろつと紅美子さんを睨みました。とまた雌鶏がぢろつと睨みました。紅美子さんは、またひやりとしました。が紅美子さんは今日はどうした事か、どん〳〵鶏に近づいて行きました。そしてまだぐつすり心地好さうに睡つてゐる一羽の雛子を捕へやうとしますと、雛鶏が消魂ましく啼き叫んで飛

㊂垣根の破れたところから覗いて見て居た一休
「新左衛門なか〳〵やるな、だが、さうはさせぬぞ。今にとり返しやるぞ。」



㊃使の納所坊主が新左衛門の玄關へ
「弔は出家の役目只今お手打になりました 私の宅のもの葬つてやりたいと思ひますので、死體を受けとりに參りました。」と談じ込みました。



び上りました。するとその聲に驚いて、ぐつすり寢込んでゐた雛子も眼を覺ましました。ねむい眼で何も分らないのに、ピヨピヨと喧しく啼きながら、雌鷄の圍りをぐる〳〵廻り出しました。あまり突然に眼の前で、啼きたてられたので、紅美子さんも吃驚してしまひました。

それでも氣をとりなをして、捕へようとすると小さい圓い身體で輪ぶ樣に走り廻つて逃げました。そして、一生懸命に短い足を繰り出す積樣が、それはそれは滑稽でありました。紅美子さんはそのおかしさと面白さとに嬉しくなつて一生懸命に、雛子を捕へやうとその後を追ひまはりました。雄鷄は雌鷄に聲を限りに啼き叫びました。

その時、何處から流れて來たのか、眞白い雲が空を飛んでゐました。お陽樣は、さつきから紅美子さんのする事を御覽になつてをられましたがとうとうお怒りになつて、その雲の中にお隱れになりました。

と、四邊が急に薄暗くなりました。

漸くすると取次ぎが一包の包を持つて來ました。

「え……死骸はもう手前の憂所で火葬にいたして終ひましたが、折角ですから身につけて居りましたものを差上ます」と言つて、納所に渡しました。

お母樣はあまり鷄が啼くので、飛んで庭にお出になつて、その樣を御覽になり、

『紅美子さん！　なぜそんなおいたをなさるの。いけません。いけません。』

とお叱りになりました。そして走つて來て紅美子さんのお手をおとりになりました。

いまゝで、面白さに夢中になつてゐた紅美子さんは、お母樣から御叱りをうけると俄に興ざめて、反つて悲しくなりました。で、そつと頭を伏せてゐました。すると双方の眼に、大きな豆粒ほどの涙がたまつて來ました。

『どうしたの、紅美子さん、鷄が何かおいたをしたの』

と、お母樣は優しくお問ひになりました。すると、紅美子さんは小さい聲で、

『お母樣、私ね、雛子を抱いてやらうと思つたの。だつて鷄はちつとも私になつかないんですもの。玉子をとりに行つた時でも、鷄屋をただ覗きに行つた時でも、いつも變な眼つきで私を睨んでばかりゐますのよ。それでね、お母樣、私雛子を抱いてやつてお守りをして鷄と仲直りしやうと思つたのよ。お母樣、悪い事なの。』

と申しました。すると、お母樣は嬉しさうに、にこ〳〵と笑つてお仰いました。

『あらさうだつたの、私が叱つたのは悪かつたわね。だけど紅美子さん。鷄は決して紅美子さんを悪く思つて逃げたり啼んだりしたのではありません。あれは鷄の性分なのよ。それだから鷄の好きな樣にしてやつて無理に抱つこしたりしてはいけません。』

お陽樣は紅美子さんとお母樣とのお話をお聞きになつて、紅美子さんの優しい心がお分りになると、大變お喜びになりました。ですぐに雲を出て、もとの樣にニコ〳〵と笑ひながら、紅美子さんに溫い光りをふり注ぎがれました。（をはり）

一休和尚納所が持つて來た包を開かして見ると皮ばかりに、一杯食された「戒念至極」としよげました。

猿と兎の旅

橘　逸雄

ある森の中に、猿と兎が住んでをりました。二人は仲のいゝやうな、悪いやうな、喧嘩してゐるかと思ふと、すぐ笑ひあつて仲よく遊んでゐました。そんな友達でした。

太陽がカン〳〵照りつけた暑い日でした。兎が午睡からさめて、まぶしさうに周囲をながめながらぼんやりしてゐますと、後から猿が來てふいに肩をたゝきました。

「おい、もうさめたかい。ずいぶんよく寢るね。僕はこれから三國峠の方へ旅しようと思ふんだが、君一しょに行かないか。そりや面白いよ。あちらには僕の友達もゐるんだし、ぜひ行かうよ。」と、猿が熱心にすゝめましたので、兎もつい誘はれて、

「ぢや行かう。」てうことになつて、二人は早速旅の準備をしました。永い旅の間のことですから、途中で食物がなくなつては困るといふので、二人はめい〳〵大きな袋に、いろ〳〵な食物をつめこんで、それを首にぶらさげて出かけました。

二人は、途々珍らしい草や樹におどろいたり、聞いたこともない鳥の啼聲に、ふしぎさうに耳をかたむけたりしながら、愉快に旅をつゞけました。

そのうちに、大きな川のほとりへ出ました。水は蒼々として、それに流れは疾いし、山の中のことゝて橋一つかゝつてゐません。二人は當惑しました。が、幸と流れのなかには、大きな石があつちにも、こつちも頭を出してゐました。そこで石の上を跳んで行けば、らく〳〵と向へ渡れることに氣がつきました。さて二人が渡らうとしますと、猿が兎をよびとめて言ひました。

「僕たちはこんなに澤山な食物をもつてゐては、とても石の上を跳んで行くことが出來ない。落つこちでもしたら大變だから、この食物を皆川の中へ捨てゝしまはふ。」

猿はさう言つておいて、じぶんでは兎に見えないやうに、石を拾つて、それをポチャン〳〵と川の中へなげました。

「さあこんどは君の番だよ。」と言はれて兎は正直に袋から食物を出しては投げ、出しては投げして、皆川の中へ捨ててしまひました。

ジリ〳〵といりつけるやうな暑い日を美しい並木路に避けながら、二人はずん〳〵行きました。ふと見ると、猿はからつぽになつたはずの袋から甘しさうな果物を出して喰べてゐました。

「どこでそんなものを拾つたのか。」と兎はふしぎさうに尋ねました。

「これは……これはさつきあの川を越す時に、捨てゝしまはふと思つたのだが、何だか愈にらく〳〵と越せさうに思へたから、捨てるのがおしくなつたのだ。」

「ぢや、君は僕を騙したのだなア、そいつは僕にも分けなけりやならぬよ。」

猿は知らぬ顔して歩いてゐました。

二人が森へ入つていちばん先に目についたのは、青い香橙の果が枝の折れさうなほど澤山なつてゐるのでした。なかにはもうよく熟して黄くなつてゐるのもありました。兎はそれを見ると、跳び上つて喜びました。そして、駈けつて行つて採らうとしますと、

「君は青いのを採りたまへ。青いのはずいぶん澤山あるから、僕は黄いのでがまんしておくよ。」と、猿が後から言葉をかけました。

兎は青い果を採つて咬んで見ましたが殻が堅くつて齒がたゝないほどです。それでも一生けんめいに咬んでゐました。その間に猿は黄い甘しさうなのをばかり採つて喰べてゐました。

『これはちつとも甘くない。僕も黄いのを採らう。』と兎が言ひました。

『いけない〳〵。黄いのを喰うと病氣になるんだよ。』

『ではどうして君はそんなものを喰ふのか。』

『僕は別だよ。』

兎はしかたがないのでまた顔をしかめながら、青いのを喰つてゐました。すると、猿は急に向の山へ駆けつて行きました。「こいつはうまい」と思つて兎は黄いのを採つて喰べました。あんまり甘いのでどん〳〵喰つてゐますと、後の方から、

『こらッ』といふ聲がしました。兎はびつくりして、猿の行つた方へ逃げて行きました。たぶん獵師か百姓でも來たのでせう。

太陽が西の山へ沈みかけた頃、やつと二人は猿の友達の

家へつきました。二人は友達のもつて來てくれた水で旅のほこりを洗ひおとしました。

『僕は口があれたから、御飯を喰うと口が焦けるかも知れないんだ。そしたら君は早速草を採つて來てくれたまへ。』

だしぬけに猿がこんなことを言ひましたので、兎は變なことを言ふなァと思ひながら點頭いてゐました。

やがて、猿と、兎と、猿の友達の三人は食卓について、御飯を喰べかけました。しばらくすると、

『口が焦ける〳〵。』と猿が苦しさうに叫びました。兎はびつくりして草をとりに行きました。そして、大急ぎで、草を一握とつて來ますと、食卓の上にはもう何にもありませんでした。

『おひにく君が出るとすぐ、仲間がやつて來て、君の分を皆平げてしまつたのだ。どうもお氣の毒さま。』と、猿は平氣で言ひました。

兎はこれまでにない餓い思ひで床につきました。

あくる朝早く、二人はそこを立ちました。その日はどうしたものか、一寸も食物が見つかりませんでした。とうとう暗くなるまで、二人は空腹をかゝへて歩いてゐました。

『かうなつてはしかたがない。村里へ出て豚でも捕つて喰べよう。君は料理がうまいからそいつを煮てくれないか。』と猿が言ひました。

『よからう』と兎が言ひました。

そこで、猿は豚を盗りに、兎は鍋を探しに行きました。

やがて、猿は大きな豚を盗んで歸りました。兎も大きな鍋をさげて歸りました。二人は三本の枝を地面に組んで、それに豚を入れた鍋をかけて、下からどん〳〵火を焚きました。

『これでまあしばらくぶりで御馳走にありつけるわけだ。だが、これが喰べるやうになるまでには、だいぶん閑がかゝりさうだ。一休みしよう』といつて、猿はごろりと横

になると、もうぐう〳〵鼾をかいて寝たふりをしました。兎もその邊に積んであつた薪の上で寝ました。それからほんの一寸の間です。

『たしかに兎は鼾をかいてゐるやうだ。』さう思ひながら、猿は忍び足でそつと兎の樣子を見に行きました。

兎はパッチリ眼を開いてゐました。

『何て拙いことだ』と猿は呟きながらひきかへしました。

『こんどはたしかに鼾をかいてゐるやうだ』

しばらくすると、猿はまた、忍び足でそつと兎の樣子を見に行きました。

兎の眼はピカ〳〵光つてゐました。

猿はそんなことをしてゐるうちに、疲が出てほんとうに眠つてしまひました。

猿が寝たのを見ると、兎は急に起き上つて、さつきの鍋を見に行きました。もう甘さうに煮つまつてゐましたので、ひとりで皆喰べてしまひました。そして、豚の骨を繩に結びつけて、それを猿の首にかけておきました。それはちやうど、首の毛の間にかくれて見えませんでした。

あくる日、二人が目をさましますと、村の人たちが大勢で二人をとりまいて、

『てつきりこいつに異ひねえ、豚を盗つた奴は』

『さうだ〳〵』

『殺しちまへ！』

など言つて、がや〳〵騒いでゐました。すると、兎はおちついて、

『わたしが豚を盗つたと仰るのですか それならその證據を見せて下さい。證據も見せないで、泥棒よばはりはちと迷惑に存じます。』と言つて、ぴよんぴよん踊りました。

『お、お前さんに罪はない。』とその中の一番の老人が言ひました。

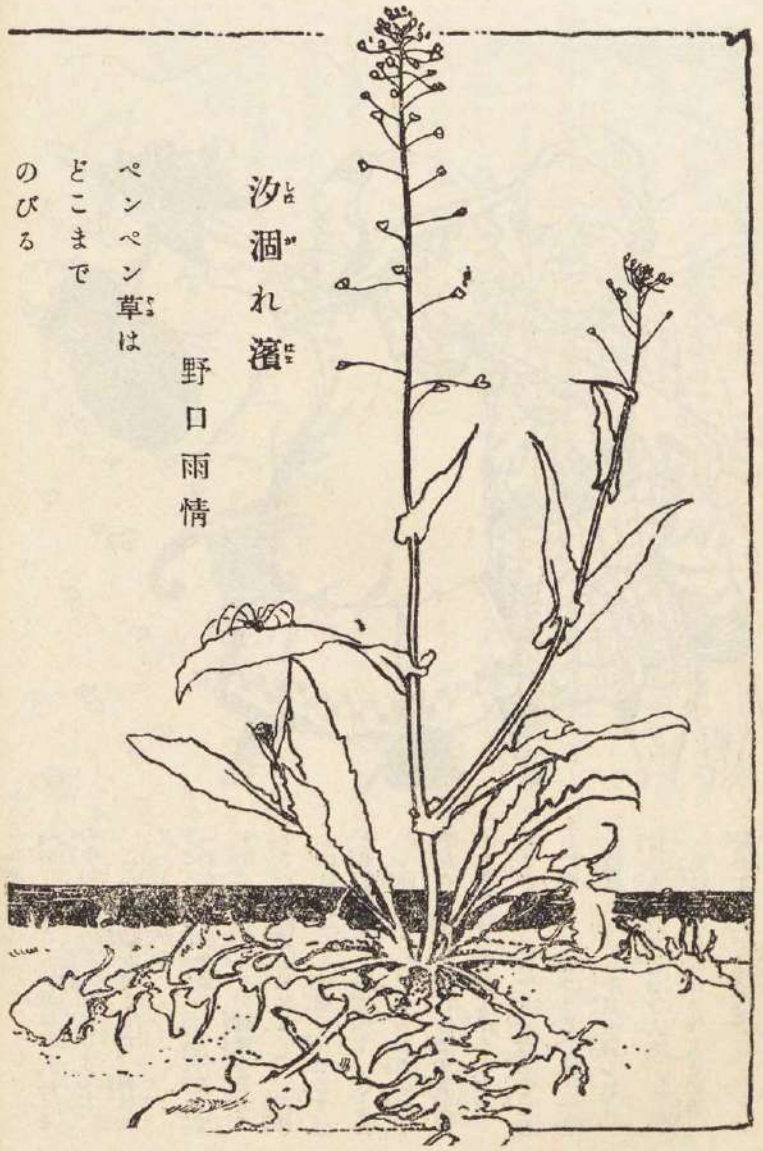
こんどは猿が出ました。猿はおど〳〵しながら

『わたしが豚を盗つたと仰るのですか。それならその證據を見せて下さい。證據も見せないで、泥棒よばはりはちと迷惑に存じます。』と兎と同じことを言つて、ぴよん〳〵踊りました。すると首の毛の間から、繩に結ばれた豚の骨がガチャ〳〵鳴つて出て來ました。

『こいつだ〳〵』人々は言ひ合はしたやうに、皆さう言ひました。

猿はとう〳〵手足を縛られて、村へ曳かれて行きました。

兎はひとりしほ〳〵もとの森へ歸りました。（をはり）



汐涸れ濱

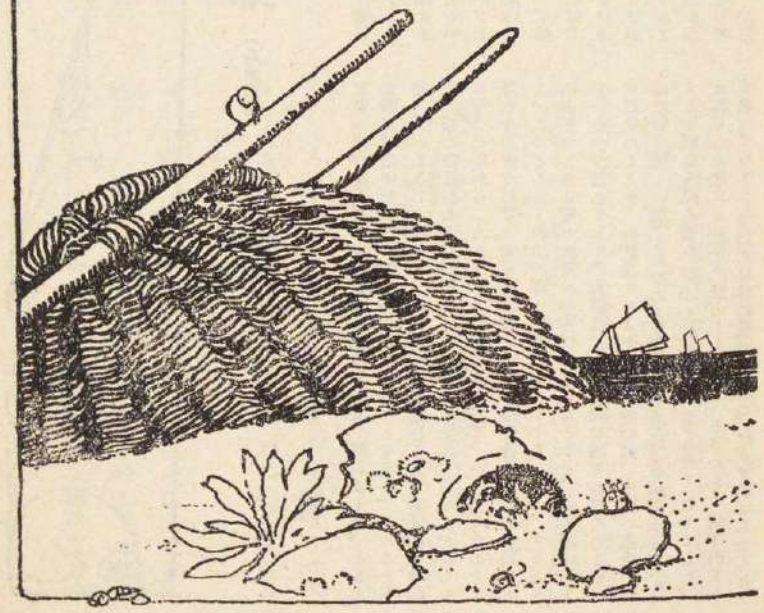
野口雨情

ペンペン草は
どこまで
のびる

港の雨は
パラパラ
雨だ

汐涸れ濱の
小笹に
たまれ

小笹も搖れろ
港も
搖れろ



琴の太郎

（長篇童話）

小山内薫

前篇までの梗概　月のいゝ晩、遠く里を離れた岬の上に腰をおろして、今年十二になる太郎といふ少年は、蕗薹の柄に手をおきながら　荒い海の沖の方から聞えて來る妙なる琴の音に聞きとれてゐました。それは鬼の海と呼ぶ恐ろしい所から聞えて來るやうです。音樂好きな太郎は、そこへ行つて、思ふさま琴を聞かうと決心しました。一度鬼の海へ行けば、二度と歸つて來られないといふ恐ろしい言傳も忘れて、急いで里へ歸つて鬼の海をさして船を出しました。ところが、太郎の船が鬼の海へは入つてからは、漕いでも漕いでも、後へも前へも一寸も動かなくなつてしまひました。するとすぐ眼の前にある鬼の島から、凄が啼くやうな聲が聞えて來たかと思ふと、船はひとりでに、島の裏の方へ廻されました。そこには半分傾いた、大きな黒い船があつて、黒い姿をした人たちが影のやうにぞろ〳〵甲板に現はれて來ました。そして太郎を甲板に運び上げました。そのうちの首領らしい人は、太郎を前へ呼び出して、いろ〳〵と恐ろしい聲で尋ねました。しかし太郎が琴聞きたさに、鬼の海の恐ろしいことも忘れてきたことを却つていじらしく思つて、油の海へ投げ込むでしまふ氣にもなれず、娘の海豚姫の遊び相手としてこの船に止めておくことにしました。それから二人は仲のよい友達となつて、いろ〳〵なことを語り合ふやうになりました。姫は、この海へ迷ひ込んだ者は誰でも、このどろ〳〵の油の海へ投げ込まれてしまふこと、すると矢にゐらつしやる鬼の神樣がお喜びになることなど、鬼の國のことを一つ一つ話しました。太郎はまた、人間の國のお祭のことや、お花見のことや、お芝居のことや、大名の行列、兩國の花火、賑かな街、美しい娘、こんなことをこま〳〵と言つて聞かせました。すると姫は人間の國へ行つて見たくてたまらなくなりました。太郎もこの船にゐる事が恐ろしくなつてどうかして逃げ出さうと思つてゐました。二人は遂に鬼の世界を逃げだす事にしました。

三

或日、姫は太郎に向つて、かう言ひました。

『太郎さん。早く行きたいわねえ。どうにか工夫はなくつて。』

太郎は答へました。

『さう。捕まるまでも遣つて見ませうか。いつまでこんな事をしてゐたつて、駄目ですから。』

『さうねえ。ぢやあ、かうしませう。船の中に大事にしまつてあるお酒を出して來て、それをみんなに飲ませませう。さうして、みんなが醉つたところで逃げませう。』

『それは好いでせう。でも船がありませんねえ。』

『船。さう。困つたわねえ。ぢやあ、かうしませう。こんだ魔の海へ船がはひつたら、その船へ乘りませう。あたしは魔界の印の投輪を持つてゐるから、油の海を通るのは平氣よ。唯お父樣にめつからないやうにしさへすれば好いわ。』

二人はかう相談をきめました。そして、何處その船の魔海へはひつて來るのを待つてゐました。

すると、その明くる日の晩、又いつもの厭な梟の鳴くやうな聲がしました。そして、油の海の方で、人の叫ぶ聲がしました。姫と太郎は急いでお酒のしまつてある倉の方へ行きました。

二人が船の中の倉からお酒を運び出した時分には、もう人の叫び聲はきこえませんでした。姫は影のやうな人達を呼び集めました。大勢の影のやうな人達は、魔王を先に立てゝ、姫の部屋へはひつて來ました。

『お父樣、けふは油の海へ犧牲の船のはひつたお祝に、お酒を皆さんに御馳走しますのよ。お父樣も一つ召し上がれ。みんなも勝手にお飲みなさいな。』

姫はかう言ひながら、魔王に一つお酌をしました。魔王は喜んでそれを飲み干しました。手下の影のやうな人達も、がぶ〳〵飲みました。忽ち、醉が廻つて來たのでせう。薄黑い影のやうな人達は、直ぐとよろ〳〵して來ました。中には、もう寢てしまつたものもあります。

丁度好い時分だと、二人はそつと甲板へ出ました。それから梯子を傳つて、さつき油の海へ迷ひ込んだ船の中へ降りて行きました。船は幸と引つくり返らずにゐたのです。

しめたと、太郎は力限り艫を漕ぎました。併し船は進みません。汗を流して漕ぎましたが、船は一寸も動かないのです。太郎は死者くるひになりました。

すると、姫は膝を叩いて、自分の左の小指を高く擧げました。小指の指輪の光がキラ〳〵光つたかと思ふと、船は急に動き出しました。矢のやうに走り出しました。太郎も一生懸命に漕ぎました。しやはせと魔王にも悟られなかつたのでせう。梟のやうな泣き聲もしませんでした。

やがて、船は油の海を出て、陸の見える所まで參りました。二人は俄に元氣づいて來ました。太郎は漕ぐ。姫は拍子をとる。もうその夕方には、難なく元の濱邊にかへつて來ました。

＊　＊　＊　＊

太郎の父は、この里で一番お金持の侍でした。

太郎の妻が見えなくなると、父親は驚きました。家來や女中までが血眼になつて、その行方を探しました。一日立つても、二日立つても、太郎の行方は知れません。それで、たうとうみんな諦めてしまひました。

ところが、十日目の夕方の事です。太郎の家の茂右衛門といふお爺さんの家來が、一人で濱へ出て、海の方を眺めてゐますと一艘の船が櫓拍子面白くこつちの方へ歸つて來るのです。初めは漁夫の船だらう位に思つてゐたのですが、段々近づいて來るのを見ますと、子供が二人乘つてゐるきりなので驚きました。

一人は黑い法衣のやうな着物を着た色

の白い女の子です。一人は紛ふ方もない太郎です。茂右衛門爺さんは躍り上がつて喜びました。

『若様。若様。』

思はず爺さんはかう叫びました。

太郎の船はやがて岸へ着きました。太郎は姫の手をとつて、陸へ上がりました。茂右衛門は飛んで來ました。

『若様。どうなさいました。お父様やお母様が大層御心配でございますぞ。それでもようまあ御無事でお歸りになりました。時に、その嬢様は。』

茂右衛門に尋ねられて、太郎は魔の島の事を精しく話しました。茂右衛門は驚いたり、感心したり、喜んだりしました。

『姫様にも飛んだお世話でございました。もうここまでお出でになれば大丈夫でございます。さあ、一時も早くお家へ參りませう。』

茂右衛門はかう言ふと、姫の前へしやがんで脊中を出しました。姫がそれにおぶさると、うんとこしよと立ち上がつて、太郎の手を引きました。そして、太郎の屋敷を志しました。

太郎の家では、死んだと思つた若殿が歸つて來たので、それは〳〵大騒ぎ。茂右衛門や太郎に魔の島の話を聞いて、姫に禮を言ふやら、御馳走をするやら、その晩は家中の家來を集めて、酒宴まで催すのでした。

明くる日は、太郎の頼みで、近所の呉服屋を呼びました。そして、姫の着物を誂へました。友禪の着物に緋縮緬の長襦袢、帶から着換まで、金に任せて、大急ぎに急がせて、その日の内にこしらへ上げさせてしまひました。

姫は見るもの、聞くもの、みんな始めてなので、その珍しさと言つたらありませんでした。着たい

着たいと思つてゐた友禪の着物も着、髪も綺麗に結ひ上げて、銀の簪まで挿したのですから、もう大喜びです。

毎日々々、太郎と二人で、山へ行つたり野へ行つたりして、樂しく面白く遊んでゐました。蝶々の飛ぶのを見て、うつとりしたり、小鳥の鳴くのを一日聞き惚れたりしました……自分の今まで住んでゐた魔の島には、こんな樂しみはなかつた。自分はなぜ早く、こんな樂しい事を知らなかつたらう。お父様や何かにもこの樂しみを分けて上げたい。日がな一日、油の海の潮を浴びながら、怪しい叫び聲を聞いてゐて、なんの樂しみがあらう。お父様はなぜ「人間」にならないのだらう。でも、もうお父様見たいに魔界の空氣に染み込んだ者は決して「人間」にはなられまい。さう思ふ自分はどうだ。自分も魔の世界に生れて、十一年その中で育つて來た。やつぱり、魔界の空氣が染み込んでゐるに違ひない。自分の心は荒い慘たらしい心だらう。きつと、きつと太郎が見たら、厭だと思ふ事ばかりだらう。どうして自分は魔の姫なんぞに生れて來たんだらう……姫はさん〳〵に自分で自分の身を思ひ惱みました。

それからと言ふもの、姫は妙に人を恥ぢるやうな樣子をするやうになりました。太郎と遊んでゐる間は、そんな事は忘れて、いつも元氣よく遊んでゐますが、一人でゐる時は、側の者が心配する程ふさぎ込んでゐるのです。さうして、手習をしたり、行儀を習つたり、一生懸命に自分を女らしい女にしようとしてゐました。

或日、太郎と姫は、二人で庭へ出て、花畑の中を歩いてゐました。風のない、草の葉一つ搖れない、靜な日でした。太郎はたんぽぽの花を一輪摘んで、姫の頭へ挿して遣りました。丁度その時、何處からともなく、空を切るやうな音がして、ぱたりと姫の振袖に當つたものがありました。

姫が振袖を返すと、直つ黑な羽の矢が一本立つてゐました。姫はそれを見ると、急に直つ青な顏になりました。そして、太郎の手をつかまへると、急いで内へはひりました。

太郎はわけを訊きましたが、姫は一言も答へませんでした。その儘默つて、自分の部屋へはひつて、泣いてゐました。

その次ぎの日も、又空を切る音がして、同じ黑い羽の矢が、太郎の家の門に立ちました。

次ぎの日も、次ぎの日も、日に一本の矢が、きつと門に立ちました。

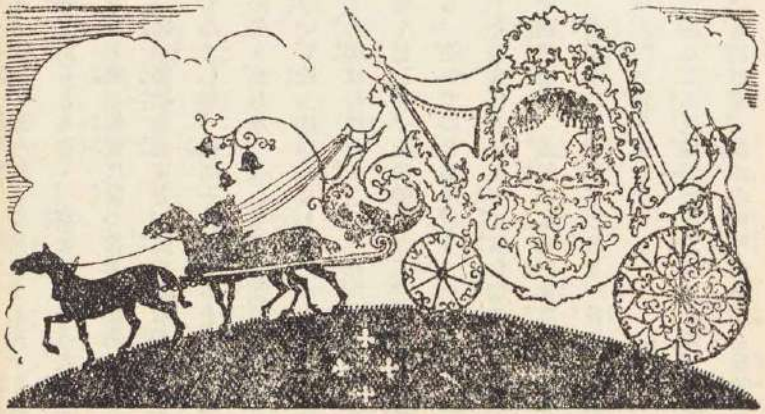
みんな不思議だとは思ひました。でも、格別氣にも掛けず、誰かのいたづらだらう位で濟ましてゐました。

ところが、ある日の事、濱邊へ漁船が一艘着きました。それはこの村から漁に出た船で、出た時の乘り手は十人でしたが、今歸つて來たのを見ると、十人の人影はまるで見えないのです。十人の中の一番若い漁夫がたつた一人、船の中に横つ倒しになつてゐるのです。

濱の人は大騒ぎをしました。早速その若い漁夫に氣つけ藥を飲ませて、わけを聞かうとしました。

漁夫は目を開くと、いきなり大きな聲を出して叫びました。

『姫を返せ。姫を返せ。魔の力は大きいぞ。人も家も、岡も山も、忽ち滅びるぞ。太郎。太郎。姫を返せ。いとしの姫を返せ。返さねば、太郎。黑羽の矢は汝の喉笛を射切るぞ。』（つゞく）



蟻のお國（長篇童話）

長田秀雄

▽▽▽▽▽▽▽前篇までの梗概　昔支那の國に淳さんといふ人がゐました。淳さんは偉い人で陸軍の士官にまでなつたのでしたが、毎日お酒ばかり飲んでゐましたから、いつか免めさせられました。淳さんはそれが不平で、それからだん〳〵お酒を飲むやうになりました。ある日、例のやうにお庭の槐の木の下でお酒を飲んでゐますと、蟻が長い列を造つて、槐の木の根の穴に這入りました。淳さんはそれを見てゐるうちに、いつか眠つて了ひました。目がさめて見ると、大槐安國といふ國のお使が、王樣のお命で、淳さんを王女樣のお聟さんにしたいといふので迎へに來てゐました。淳さんが大槐安國へ行つて見ますと、お友だちの周さんや、田さんが、やつぱり王樣のお命でよばれてゐました。そこで皆とお酒をたんとよばれて醉つてゐますと、大臣の段さんが來て、明日王樣にお會ひになるやうにといひました。

二

淳さんは何うしても心が落付かないので、その晩は、夕飯の時御馳走になつた折角のお酒もあんまり深くは呑まないで、早くから、奇麗な錦の布團の上で寢てしまひました。

『何うも不思議だな。』と、さて、横になつたものの、何うしても眠られないまゝに、淳さんは凝乎と考へこんでしまひました。

夜が更けるに從つて、御殿の内はしいんとしてきました。

淳さんは今日始めて會つた大臣の段さんをふと、思ひ出しました。大へん親切にはみえるが、何となく眼付が晴々としてゐません。ひよつとかすると、心の惡い人ではないかしらと、かう淳さんは考へました。その内にうとうととなつて、とうたう淳さんは眠つてしまひました。

淳さんが眼をさましたときは、もう部屋の内に朝日が一パイ映しこんでゐました。

『してみると、俺は本統に大槐安國に來たのだな。夢ではなかつたのか――それにしても俺の家はどうなつたらう。相變らず友だちが、俺がこんな處へ來たのも知らずに訪ねてきてゐやしないかしら。皆さぞ驚くだらう。待てよ。俺は家の者にも、何とも云はないで出てきたが、年をとつたお父さんが、歡いていらつしやりはしまいかな』と、こんな事を取止めもなく考へてゐるところに、

『御目覺で御座りますか。』と云つて、例の大臣の段さんが入つてきました。

淳さんは大臣が家來に持たせてきた、深紫の禮服を着て、黑い紗の冠をかぶつて、段さんと二人で大槐安國の王樣に御眼どほりをしに行きました。雪のやうな大理石の階段を上ると、廣い御殿に錦の帷がかゝつてゐました。家來たちが大勢並んで王樣のお出ましを待つて居ります。やがて、錦の帷がさつと左右に開くと、玉座についた王樣と王妃樣の御姿が見えました。

淳さんは大臣の段さんと一緒にそこに平伏しま

した。

『ようこそ御出で下さいました。あなたを私の聟とする事が出來たので、私は大へん嬉しいのです。』と王様から御聲がかゝりました。

そこで淳さんは恭やしく、

『私のやうなのまらない者が、そのやうな勿體ない仰をかふむりましては、却つて恐多く存じます。』とお答へして、また平伏しました。

王様は大へん御喜びで、すぐ大臣の段さんに

『それではお前早速吉い日を撰んで婚禮の仕度をとゝのへるのだぞ。』とお命けになりました。

王様の御眼どほりをすました淳さんは、またもとの東華館へ歸つてきました。婚禮の日は秋の十五夜の晩ときまりました。

愈その日になりました。淳さんは眩ゆい金の飾のついた馬車に乘つて、さまざまの花の形をした奇麗な提灯を持つた家來たちや、樂隊の列を造つて、都の大通りを通つて靜かに婚禮の場所へと行きました。往來には、例の紫の衣服をきて、黒い頭巾をかぶつた人たちが、王様の御聟さんを拜むために、身動きも出來ないやうに、一パイ出てゐました。淳さんの馬車が通ると、その人たちが、萬歳々々と大きな聲で喜びの叫びを上げました。

王様のたつた一人のお姫さまは、金枝公主と云ふお名まへでした。淳さんはこの方の御聟さんになつたのです。

金枝公主はこの國で一番奇麗な女だと云ふ噂を、此處へくると、すぐ淳さんは聞きました。けれども、まだ一度も御眼にかゝつた事がありませんでした。

『何んな女かしら。』と、淳さんは途々考へてゐました。

淳さんの馬車は、その内に、王様の離宮に着きました。貴とい身分になつた淳さんが、金枝公主と御夫婦になつて、これから住ふ御殿です。そこでは御婚禮がある事になつてゐたのです。

大へん立派な式が始まりました。

淳さんは金枝公主を始めてみました。お月さまのやうに美くしい方でした。淳さんはもう嘻しくつて耐りませんでした。

二人の夫婦かためのの盃がすみますと、淳さんと金枝公主は、立派な年を取つた坊さんに案内せられて、王様と、お妃様との前に進み出ました。

御殿に出てゐる御家來たちは、皆物も言はないで、凝乎と、新らしい御夫婦の方を見つめてゐました。すると、主様が淳さんに

『あなたは私の娘と夫婦になつたのだから、これから一生懸命に、私をたすけて、國の政治を始めて下さい。』と、おつしやいました。

淳さんはたゞ默つて頭を深く低げました。

その晩は、この大槐安國の人民たちは、夜つぴて寝ませんでした。大きな十五夜のお月さまに照

らされて、皆嘻しさうに、

『萬歳々々』と、叫びながら、樂器を彈いたり、お酒をのんだりして、家の軒につるした花の形の美しい提灯の下で、踊り狂つて遊んでゐました。

花火がポンポンと上りました。そのたびに子供たちが『わつ。』と聲を上げて喜びます。——青ガラスのやうな空には、パッと奇麗な花火がひろがりました……

淳さんと金枝公主は大へん仲がよく暮らしてゐました。毎晩、靜かな夜が更けると、二人で、その離宮の二階の窓のところに坐つて、笛を吹いたり琴を彈いたりして遊んでゐました。お月さまが高い空から、凝乎とこの美しい御夫婦を見てゐらつしやいました。

さて、こんな樂しい日が續いて、二人は夢のやうな氣持でゐます。この大槐安國の隣りに檀蘿國

と云ふ國がありました。そこは不思議な國で、男ばかりしきやゐない處でした。

從つて、國の人々は氣が荒くて、ほんの少しばかりの事にもすぐ腹を立てゝ、戰を始めます。そのために傍の國々から毛虫のやうに厭がられてゐました。

その檀蘿國の皇太子が、奥方を貰はうと思ひましたが、自分の國には女が居ないので、もう早くから、隣國の大槐安國のお姫さまに思ひをかけてゐました。ところが突然に、淳さんが來て貰つてしまつたので、大さう腹を立てゝ、攻めよせてくると云ふ噂が、大槐安國に聞えてきました。

大臣の段さんは大へん驚いて、すぐ王樣にそのお話をしました。王樣も吃驚しておしまひなすつたのです。

そこで早速王樣の前で、大勢御家來が寄りあつまつて、戰の相談が始まりました。淳さんも無論出席したのです。

金枝公主と淳さんとは、大そう國中の人に恭まはれて、仕合な月日を送つてゐましたが、淳さんは、お父さんや家の事が氣にかゝつて仕樣がなくなりました。自分はかうして樂しい思をしてゐるが、自分が居なくなつたので、さぞお父さんは心配してゐらつしやるだらうと思ふと、つい氣が沈んでくるのです。そこで、淳さんは金枝公主に相談して、お父さんに手紙をかいて、それを使に持たせてお父さんの處に送りました。手紙の中には、今の自分の有樣をくわしく書いたのです。王樣は大さう淳さんの孝行な心をお賞めになつて御家來の中で、一番年も若く氣象もしつかりした人を使に撰んで下さいました。

重ねがさねの王樣の御恩に感じて淳さんは

『こりや一つ生命がけで御恩報じをしなければならん。』と思ひました。そこで、戰の相談の席上で、淳さんは王樣に

『陛下にお願ひいたします。此度の檀蘿國との戰には、是非私を大將にして頂きたいと存じます。きつと、勝つてお眼にかけますから。』とかう申上げたのです。

王樣は大そうなお喜びでした。そして

『あなたが大將になつて下されば、こんな嘻しい事はない。』とかうおつしやいました。

淳さんは喜び勇んで、早速戰の仕度に取りかゝりました。まづ淳さんは兵隊を戰に馴れさせるために、龜山と云ふ深い山で、牧狩をしようと目論みました。

王樣からお許が出たので、淳さんは兵隊を揃へて、龜山へ行つて、大がゝりな牧狩を始めました。勢子の呼びこゑが谷に響いて、銅鑼や太鼓の音が、木の梢を顫はせるやうに鳴り渡りました。大きな虎や、鹿が驚いて逃げてくるのを、弓で射たり、槍で突いたりして皆殺してしまひました。

牧狩がすんで、兵隊たちは、隊を正しく組んで、都に歸つてきました。打取つた獣の數は大したものでした。王樣のお喜びは、非常なものです。

淳さんは一番敵に近い南呵郡と云ふ土地の太守に任ぜられて、金枝公主と、大勢の兵隊をつれて行く事になりました。檀蘿國が攻めてくれば、どうしても南呵郡で防がなければならないのです。

敵の樣子は毎日毎日大槐安國に聞えてきます。

――人民たちは、もうこの都に攻めて來やしないかと思つて、氣が氣ではありません。

中には、家中の道具やらお金やらをまとめて、逃げる仕度をしてゐる者もあります。（つゞく）

幼年詩

若山牧水選

雨が止んだ後（賞）

滋賀縣古保利小學校高二

木俣修二

雨があがつた。
東の山がはつきり見える。
汽車の煙
白い煙
北へ行くのがよくわかる。

評、雨後の景色が實にはつきり歌つてあります（牧水）

森の火事（賞）

小石川原町廿一（十四歳）

山崎和興

ヂヤン、ヂヤン、ヂヤン
火事だ〳〵、森が火事だ。
兎君自慢の駈け足だ。

熊君のそ〳〵落附いて、
とうとう尻尾をやいちやつた。
そこへお猿の消防隊、
シユツ、シユツ、シユツ、タラ、シユツ シユツ、
眞赤なお顔を尙ほ赤く、
一生懸命シユツ、シユツ、
ようやく 消えたら、のろまのもぐらがやけしんだ。
狐は自慢のひけやいて、
痛い〳〵と泣いて居た。

評、たいへん面白い、お伽芝居を見る樣です（牧水）

友と別れる（賞）

東京府下王子小學校尋五

佐々木ひさ江

私のすきな友達が
もすこしたつとゐなくなる
私はかなしくなつてきた
今まで仲よく遊んでゐたのに
どういふわけかしらないが
もすこしたつとゐなくなる

評、少女らしい悲しさがよく出てゐる。こんな記憶は永くあなたの一生に殘るで

童謠

野口雨情選

煙

熊本縣熊本市萬町一丁目

土方學一

お湯屋の煙は　どこまで昇る
天まで昇る
お星樣とろと　天まで昇る

大將ごつこ

旅順口育英町四一

池田早苗

どなたが大將
どなたも大將
どなたが家來
どなたも家來
それでは駄目だ　私は歸ろ

土筆

兵庫縣武庫郡須磨町東須磨

塚田喜重

つく　つく　土筆
土筆ン坊主
ひよこ　ひよこ生えた

お風呂

京都市寺町通錦小路上ル

福岡仁堂

ヂヤツブ　ヂヤツブ　お風呂
坊やも　はいろ
みんなも　はいろ
ヂヤツブ　ヂヤツブ　お風呂

三日月

栃木縣宇都宮市泉町

間彦忠夫

ホーホー鳥が
ホー　ホー　鳴いた
三日月樣は　隱れつちやつた

釣鐘

長野縣南安曇郡烏川村岩原

藤原哲雄

東の空から夜が明けた
お寺の釣鐘撞きだした
お日樣森からあがつて來

茶の木

茨城縣眞壁町下妻町

中里靜子

雪雪　こんこん降つて來た
お庭に　こんこん降つて來た
お背戸の茶の木に
みンなたまれ

鳶の子

京都市不明門松原上ル

竹村千代彥

とんび　とんび　鳶の子
ピートロトロ　鳶の子
お棺へかへつて　晝寢しろ

雪が降る

北海道十勝國帶廣町東二條

松田喜一

こつそり默つて雪が降る
こんこん　こんこん
雪が降る
お一寒い　お一寒い
こつそり默つて雪が降る

朝の道

鳥取縣鳥取市川端三丁目

伊谷しう

草の上に　露の玉が生れた
木の芽晴れの朝の道
べろり　べろり　牛が
なめていつた

染屋

鹿兒島縣鹿兒島市上荒町

逆瀨川健

染屋のおばさん
染賃貸さぬ
三年あとに貸したらとれぬ
それから戀りた

靜な日

三重縣河曲郡若松村

伊藤常雄

あつちの村から
ボーン　ボーン
こつちの村から
ボーン　ボーン

せう（牧水）

青蛙

仙臺市北目町二五（十六歳）

鈴木幸四郎

青蛙すわつてる
大きな目玉の
青だるま、
三びき
蟲が飛んでくると
だるまはうごく、
ぴよこ
ぴよこ
ぴよこ

評、これも面白い。然し今度は全體にいつもよりまづかつた、このつぎうんと勉強して下さい（牧水）

ゆめの子

東京市外巣鴨町二ノ十三（十五歳）

人見靜子

ぴい〳〵〳〵
ふえの子が
かさなこえで
おもしろい
ねむりのうたを
うたつてる
よい子が
早くねむるよに
ゆめのつかひの
ふえの子が
お伽の笛を
ふいてゐる

お伽の國

東京市本郷小學校尋六

岡本秀太郎

夢のお國の王樣が
おとぎの國へ行かうとて
なぞの渡しを渡る時
七色虹が立ちました。

□佳作△蕭氣　東京　中野春次△ヒバリ　北海道　天野英三郎△カナリヤ　福島　佐久間末吉△カンナ　東京　山崎和喜△雨ふり　福岡　加藤かずよ△鐘工場　廣島　木村金藏△猫とねずみ　大阪　堀田一二三△子すゞめ　京城　佐藤義信

お寺の釣鐘　ボーンボーン

蛙

横濱市長者町二ノ二五

中山耕一郎

蛙〳〵　何んに來た
泣く兒のおめめみ縫ひに來た
泣く兒は居ぬか
松葉の針で　チクチク縫ふぞ

流れ星

東京市小石川原町三一

山崎正秋

すーい　すーい
流れ星
ぴかん　ぴかん　飛ぶお星
どこへ飛んだか
知りたいな

雲雀

東京市四谷區舟町五

業室金泥

雲雀　雲雀　畑の雲雀
火の番たのむ
天まであがれ

橋

山口縣柳井町柳東

三宅石峰

ゆつさゆつさ橋は
ゆつさゆつさ　ゆれる
和尚さん通つた
小僧さん通つた
下駄はいて通つた

とんがり狐

東京市麹町區六丁目七

長谷川良夫

向ふの山の　とんがり狐
お山が火事だ
ほつほと火事だ
燒け死んちやつた

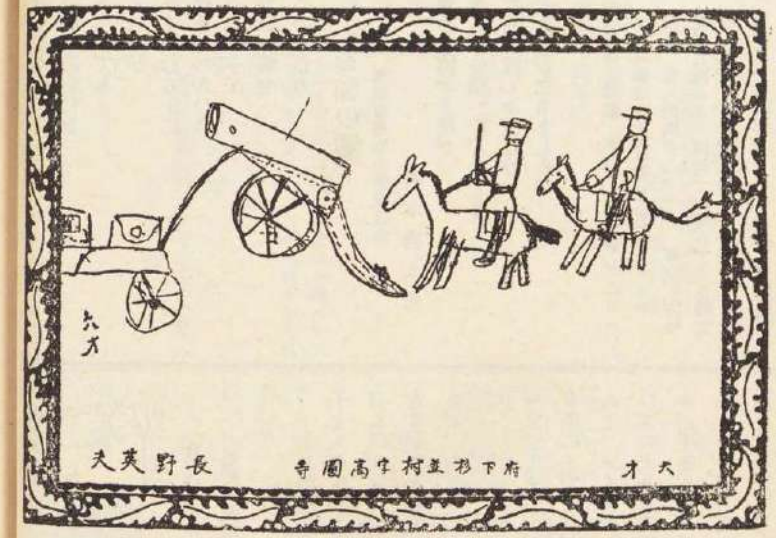
綴方

ポール（賞）

長野師範附屬小學校尋二

井上まさ子

ポールは遠足の次のにちようの日に子どもを生みました。まだ小さいので目も明かないで、クンクンとないてゐるすがたを見てかはいくなりました。私が、おさかなを持て、物おきに行つて「ポールちやん、ちよつと赤ちやんを見せてちやうだい。」といつて、一ぴき手にとつてひざの上にのせて見てゐると、ポールはよそみもしないで私のひざの上を見てゐます。ちやうどポールが子を生んで三日目の朝のおひる頃子どもをだいておえんの上にのせてやると、子どもは日あたりのよいのにとろこんで、ポールのおちゝをのんでゐます。私は「ポールがお母樣になつたんだねえ。」といひました。ポールは一しやうけんめいに、子どもにおちゝをのませてゐます。一ぴき一ばん大きいのが、おなかもやぶけるやうにのみました。もう一ぴきの黑と白のまざつたのは、ふしぎなほど毛がつや〳〵として黑びかりに光つてゐます。もう一ぴきのちよつと白のまざつたのも居ます黑と白の黑びかりが、おちゝをのんでしまふとおとなしくして、私のひざの上でねてしまひました。それから少したつて、ポールが物おきの中にはいつてなきますから、子どもをだいてまたポールの巣の中に入れてやりました。ポールはまたおとなしく子供をだいて居ました。私はそばに立つて少し見てゐました。私は思はず「アラお母樣ポールにまだごはんをやんないんですか」



自由畫　府下杉並村字高圓寺　長野英夫

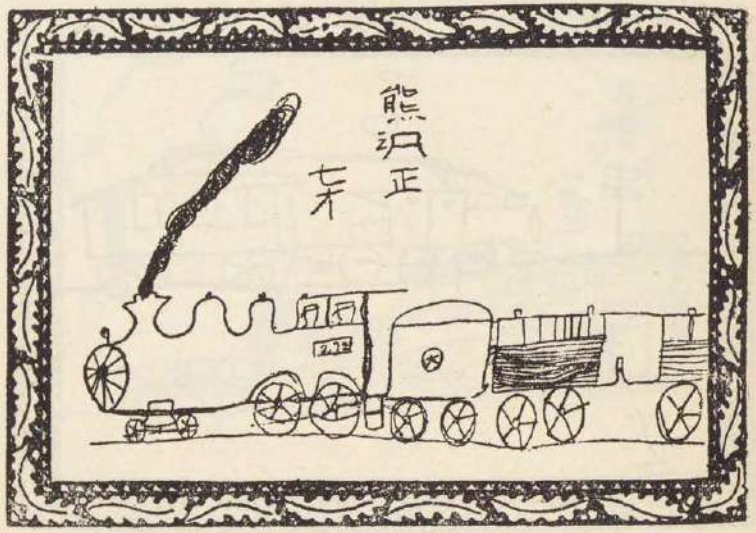
といつて、物おきから出て行きました。ボールの子供をよく見てゐますと、おかしいことに、子どもがべんじよに行くことがわかるのでせう。ボールは少したつと、じぶんの赤ちやんのおしりをなめてやつてゐます。私はおかしくてたまらないので、おもはず「ホホホホ、、、」と笑ひました。ボールはへんなかほをして私の顔を見てゐました。

佐藤時計店（賞）

東京市下谷區谷中小學校尋五　平　楠　俊　郎

主人はさつきから懐中時計をなほしてゐたが、ようやく出來たとみえてほかの時計をなほしにかゝつた。小さな時計屋だから小僧は一人もゐない。懐中時計が二十一あつておき時計が六つあつた。奥の方にぼん〳〵時計があつた。そのうち客が來て「まだ時計は出來ませんか。」といふと、主人は「まだ出來ません。」といつた。客はへんな顔をしてかへつて行つた。

ぼん〳〵時計が三時をうつた。もう三時なのかと思つてかへつた。

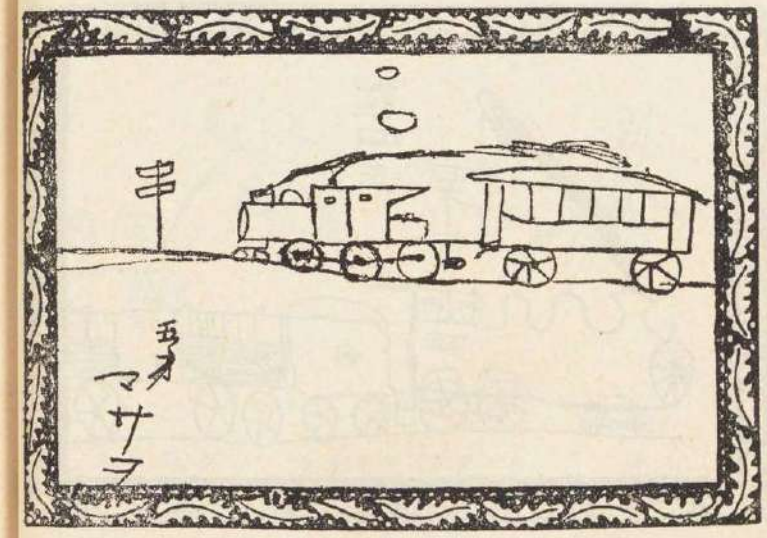


自由畫　（賞）　三重縣三重郡河島村田　熊澤正

つくつくぼうし取り

滋賀縣伊香郡古保利小學校高二　木　俣　修　二

お父さんが余吳川橋の方へつくつくぼうしを取りに行つて來て吳れといはれた。僕はひとりで行くのはかなはんと思つてかどへ出たら、喜一が遊んでゐたので、つくつくぼうし取りに行かんかとさそつたら「よし行く」といつたので、やくざな風呂敷をもつて余吳川づつみの方へ行つた。日は照つても風が強うてよわつた。道ばたの畑に喜一とこのおばあが畑うちをしてゐた。喜一を見ると「寒いのにどこへ行くんぢやい。あほつつらめが、でんちでもかぶれ」といつて叱つた。喜一は「寒いことあろかいや、ちゆくちゆくぼしとりよい」といつて走つて行つた。僕も走つてついて行つた。余吳川橋を渡つて向ふ側へ行つたが短いのが二にぎりばかししかなかつた。こちらへ歸つて野道を行かうとしたら後で「オイオイ」といふ聲がしたので見たら、忠と喜一とこの秀とおすまが走つて來た。秀が「兄よ、おばがおこつてたぞよ」といつた。喜一は「何んぢやい、おこりむしぢやがな」といつた。



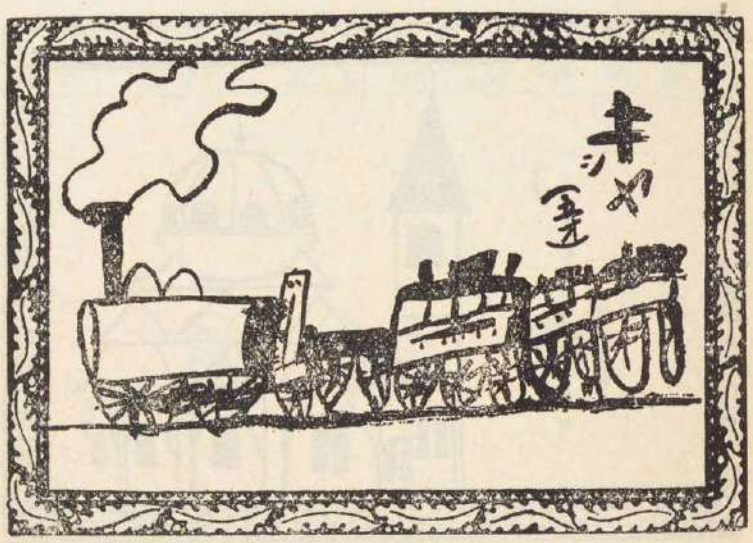
自由畫　マサヲ

五人が細い野道を一町程くねくね行つて、かやの切株の澤山あるとこへ出た。そこには、長いのが澤山あるので競爭してとつた。長いのは一尺位になりかけてゐた。はたの川べりによいのがあつたのでとりに行つたら、もうすこしで川へはまりかけたのでびつくりしてやめてしまつた。そのうち短い頭の青いのばつかしかない樣になつたので、皆なのもつてゐるのを風呂敷の中へ入れて、今度は田圃道ばつかり行つて流れへ出てどん〳〵走つて歸つた。忠と秀とおすまを後にして喜一と二人で走つた。おすまとこの前へ出て家へ歸つた。お父さんに見せたら「よいのがようけあつたわい、うまかろ」といつて喜こばれた。

手工ノジカン

東京市小石川區青柳小學校尋二　佐藤嘉彦

アル手工ノジカンニセンセイガヨウジガアルトイツテミンナニノリヲクバツテカラ、スキナモノヲコシラヘナサイトイツテデテユキマシタ。センセイガイナイトミンナソロ〳〵トサワギハジメマス。私ノ前ノ本ハシトイフ



自由畫　北海道帶廣町東三條　關義治

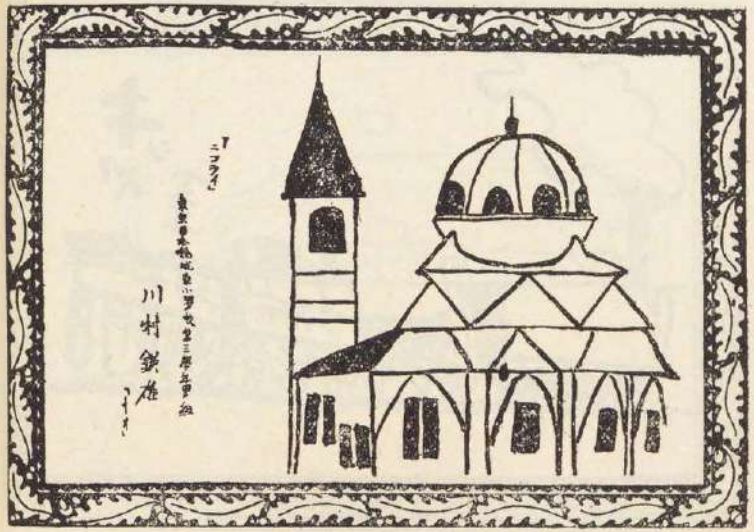
コハノリヲユビサシテ大ゴエデ「コノノリネッゴハンヲネツタゾダヨ。」トドナツタノデミンナワラヒマシタ。ソノウチニウシロノ方カラモマヘノ方カラモコソ〳〵トハナシゴエガキコエマス。私ノトナリノ中ムラクンガ「キミ本ジデ手工トカケル」トキキマシタ。ボクハキリカケノヤツコサンヲツクエノウヘニオイテ「シラナイヨ」トイフト中ムラクンハ「ホンジノ手トイフジトカナノエトイフジテカクノダヨ。」トオシヘテクレマシタ。ソノトキトガアイテセンセイガハイツテキマシタ。今マデサワイデ井タ人ハイソイデ手ヲヒザノ上ニノセマシタ。

鷄

福岡縣大牟田小學校尋五　加藤かずよ

このごろ私の家には鷄を三羽飼ひました。雄が二羽雌が一羽です。鷄が來てから毎日私が三べんづつゑをやることに母さんから言ひつかりました。それで朝は早くおきなければならないやうになりました。

まだ子供ですから卵はうみません。ただクツクツと言つて私がゑをやる時に言ふばかりです。早く卵をうめば



自由畫　（賞）　東京市日本橋城東小學校尋三　川村鉄雄

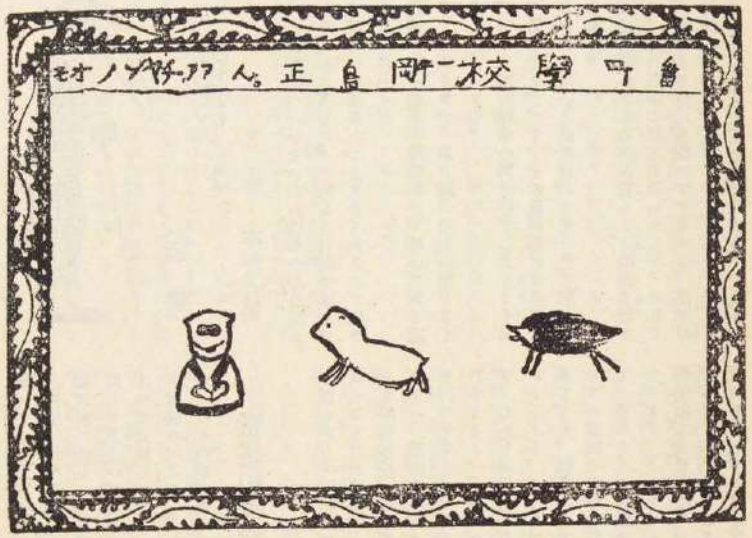
いいがといつも思ひます。父が「まだそんなに早くもちません。コケコッコといふやうになつたらうむだらう」と申しました。私は早くコケコッコといふ樣になればよいと思ひました。しかしまだ卵はうみませんでした。

それから十四五日たつて、私がいつもの樣に早くおきて、とやに行つたら、鷄がすみの方にしやがんでゐたので、それを追ひ出したら、下からまだあたゝかい美しいおいしさうな卵が出て來ました。私はうれしくてたまりませんでした。

夜マハリ

愛知縣萩原小學校尋二　佐藤　蘊

舊正月ガチカヅイタノデ、夜マハリガ、ゾクノ用心ト、火ノ用心ト、二ツノタメニ、歩キマス。私ノ村デハ、四五日前カラヒヤウシギヲウツテ、通リマス。私ハ、キノフノ晩ソノ音ヲキヽマシタ。カアチ、カアチ、カチ、カチト、ヒヤウシギノヒゞキガダン〳〵チカヅイテキマシタ。ソノ夜マハリハ、私ノウチノ前マデ來テ、ナントモイハズニ、カドヲマハツテイツテシマヒマシタ。ヒヤウ



自由畫　東京市麹町區番町小學校尋一　岡島正人

シ木ノヒビキハシダイシダイニ、トホクノ方ヘキエテ行キマシタ。

ソノキヘテ行クノヲ、キイテ井ルト、ナンダカ心ボソクナツテ、サビシクナルヤウナキガシマシタ。私ハ、サビシイ道ヲタダ一人デ歩クノデスカラ、オソロシイダラウト思ヒマシタ。

力のある神樣

長野師範附屬小學校尋二　柴木武夫

ゆうべ私がうちでさわいで居ますと、ミシ〳〵といつたので外を見ると、電しんばしらがうごいてゐました。また、ミシ〳〵いひ出したので外を見ると、さつきのとほり電しんばしらがうごいてゐます。私はお母さんにさういひますと、地しんだといつたので、おどろいてすぐ外へにげ出しました。しばらくたつてから家へかへつてお母さんに聞くと、「土の下で神樣がやるんだ。」といひました。私は「どうして神樣がこんなおもたいうちを持ち上げるんだね。」といふと「力のある神樣だから」といひました。私は「どうして神樣がそんなわるい事をするんだね。」と聞くとお母さんは「どうしてだか」といひました。

（還信）

自由畫のこと

山本鼎

△今月は學校へいかない前の坊ちゃんの畫がたくさんありました。それをみな載せ度くても、雜誌には毎月六つときめてあるので困りました。

△相變ず堅い鉛筆で薄ぼんやり描いてある畫が多くて困ります。前月號の版のお話をよくよんで下さいまし。

△三田平八君の林檎の寫生はずゐぶんよく出來て居ますよ。でも、その眞い處け三色版といふのにしないと出ないのです。色で描いてあるから。

△岡嶋眞理子さんの寫生畫もよく出來て居ますね。殊に三本の立木が眞いのです、けれども、あんまり定木を使ひすぎますよ。定木は使はない方が畫が面白くなるんです。でも、どうしても定木が使ひたければ使つてもかまはしません。

△先生、及父母姉兄に申します。子供方の美術教育に關して御質問があるなら、何でも質問して下さいまし。出來る丈要領を簡潔にしぼつて質問して下さいまし。兒は持たず、曾て教場のパトロンとなつた經驗のない私にとつてはそれが必要なのであります。

童謠の選後に

野口雨情

一番わかりよく云へば、自由畫を言葉であらはしたものが童謠だと思つて下さい。どこまでも無邪氣に、飾らずに、眞直ぐにうたつて下さい。意味を強めようとして、餘計なものを持つて來たり、無くともよい言葉をならべたりすると、童謠のれうちがそがれて了ひます。しかし眞直ぐであれば、みんなよい童謠かと云ふと、さうではありません。いくら眞直ぐでも、藝術のれうちのないものは、ほんとうの童謠とは申されません。藝術をはなれて、ほんとうの童謠のあるべき筈はないのであります。どこまでも、どこまでも、童謠は藝術品でなければならないのです。藝術品であればこそ、はじめてその生命が永久にある間になるのであります。

今回は圖分多くの童謠が集りました。けれども私の云ふことを、未だ理解して下さらぬ方も多いやうに思はれました。どこまでも童謠は藝術であることをよく理解して下さい。

應募童話を讀みて

選者

今月集つた數十篇の童話の中から佳作として野島氏の「地震の起る譯」羽賀氏の「お日樣の年」伊藤氏の「姉妹」副島氏の「黑のお話」の四篇を佳作として選びました。併し、前號に佳作として擧げた三篇中大西　淳氏の「白犬」梅津寛夫氏の「我儘な花」の如き優秀な作の得られなつのが殘念でした。本月のには教訓を露骨に現した作が澤山にありましたが日曜學校のお話でない限り今一層の藝術化が必要でせう。（本社宛の數篇は翌月の選に廻つて居ります。）で、次號の推奬童話として次の作を選びました。

白犬

大西　淳作

この作は何處か未成品の感じがしたがらも、作者の少年時の回想であるだけに、發刺とした力をもつて人に迫ります。この作者は創作家として天分ある人の樣です。梅津氏の「我儘な花」はよく纏つた無難な作だけに、從來の型にはまつた點も見え平坦に過ぎて力に乏しいのが惜しく思はれました。併し、いゝ作ですから適當の折に發表したいと思ひます。

綴方について

選者

こんどは、綴方の集りかたが、いつもより少かつたのです。學年が變つたり、休學になつたりしたためでせう。もう學校も始まりましたから、また新しい氣もちで、どし〳〵よこして下さい。修身や、讀本の教科書にあるやうなことを書いてよこしたのは駄目です。皆さんが、日々學校や家庭や野外で經驗なさることを正直に書いて下さい。

自由畫の宣傳

山本鼎氏が我國に於て始めて自由畫を提唱せられてから滿一年になりました。今や自由畫熱が驚くべき勢を以て、全國に普及しつゝある事實に徴して見ますれば、氏の宣傳の効果の空しくなかつたことを思はしむるに充分であります。兒童自由畫展覽會」の如きも、最初長野縣小縣郡神川村小學校に於て開催されたのを嚆矢として、續いて、同縣下伊那郡龍丘村小學校に開催されました。その頃は已に長野全縣に傳播されてゐました。最近東京では、兩度の自由畫展覽會がありました。一度は神田の兜屋で、一度は赤坂の三會堂で。いづれも兒童が從來の窮屈な國定臨畫帖の束縛から解放されて、生々とした自然の裡に自由に創造したもので、自由畫の價値を強く人々に印象したことだらうと思はれました。氏は目下（四月廿二日）京都府桑山町の自由畫展覽會に臨まれてゐます。

かくの如き勢で行けば、遂に我國兒童の圖畫教育が徹底的に變革されるの日が近いうちに來るだらうと思ひます。氏の企圖する處は單に、圖畫教育の問題でなく、其實後に吾々の生活を、圓滿多趣味ならしめる爲にも、國家の勢力を實質的に鍛へ上げる爲にも、是非領有しなければならぬ各人の「道德的自由」の存する事を知らしめむとするのであります。

それから、これは別のことですが、山本鼎氏が最近金井正氏と共に、長野縣から農民美術を興されたことを一言しておきたいと思ひます。農民美術の目的は、「況く農民をして農業の餘暇を、好む所の美術的手工に投ぜしめて、各種の手工品を得、これを販賣流布しつつ、終に民族と時代とを代表するに足る「日本の農民美術」を完成し、以て美術と國力とに裨益せんとするのであります。やがてこれも全國的に普及されるだらうと思ひます。

◆「金の船」殘本について　「金の船」殘本御入用の方は編輯所宛にお申込下さい。創刊號から、ずつと、多少の殘本があります、但し殘本でも定價に變りはありません。

◆「金の船」誌友　▽長野　鈴木源君▽和歌山　木村唯夫君▽和歌山　加納喜三郎君▽長野　西田一郎君▽北海道　星川ヨシ君▽山口　河本タカ君▽東京　長野秀夫君▽愛知　中川シヅ君▽東京　植田景一君　▽新潟　宮本きみ子君▽東京　牧野傳君▽長野　濱雪子君▽鎌島　宮本三知男君▽宮城　宮本澄一君▽島根　田中兼一君▽長野　山口武夫君▽大阪　吉田太郎君▽兵庫　片岡長四郎君▽臺灣　劉清漢君▽熊手　龍兒せつ君▽長野　瀧澤俊太郎君▽福島　松田英雄君▽北海道　佐藤健三君▽臺灣　李阿茂君▽本郷　堀本篤君▽山梨　土橋部子君▽長野　土屋利君▽北海道　高木重治君▽小樽　今井孝君▽高知　河田稔君▽長野　小林民雄君▽臺灣　鎌田生君▽千葉　大島榮蹴君▽埼玉　須田幸一郎君△尾張　平井宏君▽臺灣　四本武二君▽大阪西田武夫君▽福岡　古賀信夫君▽長野　松澤俊雄君▽樣澄　近藤一路君▽長野　久保田高一君▽靜岡　山田茂次郎君

（以下次號）

子供の自由畫を募る

山本鼎

子供諸君、――こんど、この雜誌で君たちの畫をいたゞいて、僕が、みんなの畫のうちから、選むだのを、毎月六つぐらゐ此處に、寫眞の版にして出すことになりました。

自由畫、といふのは、お手本や、雜誌の畫なんかを見て、描いたものでない畫のことです。君たちが、かつてに描いた畫のことです。ですから、君たちはお手本や、雜誌の畫なんかをみて描かずに花なり、景色なり、動物なり、お母さんのお顏なり、なんでも、君たちの好きなものを、かつてに描いてごらんなさい。

お手本を見て描いたり、雜誌の畫なんかみて描いたものは、みんな落第ですよ

それから、あんまり、うすく、ぼんやりかいてある畫は、たいそういゝ畫でも寫眞の版になりませぬから、及第しても雜誌へは出されません。そのかはりそんないゝ畫は僕が戴いてだいじにしまつておきます。

大人諸君、――以上の企を御贊成下さいましっ。子供達は、本來、お手本を眞似するよりも、自由に、見る所のもの、もしくは見たことのあるものを、描き度がるものです。さういふ子供には、出來るだけ、良質の畫用品を與へて下さいまし。そして、子供を愛すると同じ愛を以て、彼れの創作を迎へて下さいまし

大人に、智、感、情がある如く、小供にも智、感、情があります。大人に美術がある如く子供にも美術がある筈です。子供の美術は彼れの眼と手によつて自然から直接に從へられた、そのものです。

◎童話童謠募集

吾々はかくれたる童話、童謠作家を紹介したいが爲めに、毎月童話童謠を募集いたします。題材は勿論作家の自由ですが、内容形式は共に從來の型を破つた、眞に藝術的な作品を求めます。

原稿の枚數は、童話の場合には十行廿字詰原稿紙八枚以内、童謠の場合は廿五行以内。優秀な作品は誌上に掲載し、且相當稿料を差上げます。

選者は、童謠は野口雨情先生、童話は當分の内編輯部でいたします。

◎「金の船」誌友募集

「金の船」の誌友を募集いたします。誌友になれば、いろ〳〵の便宜や特典がございます。誌友規則を知りたい方は編輯所宛にお申込み下さい。すぐお知らせいたします。

東京府下田端三百五十一番地

「金の船」編輯所

□少年少女の創作募集□

（原稿は東京府下田端三五一番地「金の船」編輯所へ送つて下さい）

自由畫　山本鼎先生選

自由畫のことは、山本鼎先生が、前頁に書いて下すつたから、ごらん下さい。

綴方　編輯部選

綴方は、みなさんが、見たこと、思つたことを、そのまゝふだん遣つてゐる言葉で書いて下さい。

幼年詩　若山牧水先生選

幼年詩は山なり森なり花なり何でも見たり、感じたりしたことを、みなさんの好きなやうに、詩にして下さい。

□自由畫はなるべく、半紙位の畫用紙に畫いて下さい。

□綴方、幼年詩は用紙も字數も、みなさんの自由です。しかし、解りやすい樣に墨かインクで書いて下さい。

□住所、姓名、年齢などは落さないやうに、學校へ行つてゐる方は學校名と學級を、ちやんと書いて下さい。

□人のものを眞似たり雜誌や讀本や綴方の手本など見て書いたのはいけません。

□よく出來たのは、雜誌にのせます、中でも優れたのには賞品をさしあげます。

□定價一冊三十錢　送料壹錢
□三ヶ月分三冊（送料共）九十錢
□半年分六冊（送料共）壹圓八十錢
□壹ヶ年分十二冊（送料共）三圓四十錢
振替口座東京卷〇五七貳番

廣告料は御照會次第お答へいたします

（送金の注意）

▽御注文は必ず前金で御拂込み下さい
▽送金は小爲替でも切手代用でも宜敷御座います
▽切手代用は（壹錢切手）一割增に願ひます
▽御注文の場合は單何卷第何號よりと云ふことを明瞭に書いて下さい
▽住所姓名は丁寧に分りよく御書きください

大正九年五月五日印刷納本（毎月一回大正九年六月一日發行）
東京府下田端三百五十一番地
編輯人　齋藤佐次郎
東京市麻布區飯田町六丁目二十五番地
發行人　横山壽萬
東京市京橋區月町二十五番地
印刷人　高橋郁
東京市京橋區月町二十五番地
印刷所　三協印刷株式會社
東京市麹町區飯田町六丁目二十五番地
發行所　キンノツノ社

大正八年十月十六日　第三種郵便物認可
大正九年五月五日印刷納本
大正九年六月一日發行（毎月一回一日發行）

繪雜誌界の權威

日本の子供

定價壹冊貳拾五錢送料五厘
半年分送料共壹圓四拾五錢
壹年分送料共貳圓七拾五錢

帝國劇場付畫家執筆
上品でうつくしい繪
面白くて爲になる話
毎號新工夫の大附錄
最良の幼年向繪雜誌

ナカヨシ

定價壹冊拾五錢送料五厘
半年分六冊送料共八拾五錢
壹年分送料共壹圓六拾五錢

東京市麴町九段下
キンノツノ社發行
振替東京參〇五七貳